

松雲 19

Shoun 2017 March
Shimane University Library Bulletin



ISSN 1882-4900
島根大学附属図書館報
第19号
平成29年3月



島根県管内全図(部分)

《論文》

- 分県地図の草分け『大日本管轄分地図』について(1) 船杉 力修
- 河本家の古典籍の全体像と特色 原 豊二

《報告》

- 「松江が生んだ美術史家・相見香雨
～九州大学文学部所蔵『自筆調査録』展」実施報告
村角 紀子
- 河本家古典籍のデジタル化プロジェクト
昌子 喜信
- 第1回中日若手科学技術担当者交流計画に参加して
佐藤 陽子

《自著紹介》

大橋泰夫・浜田幸絵・田邊一明

明治卅二年訂正再版



島根県管内全図



高御座

『礼儀類典図絵』（巻一）「高御座」

松雲

第19号 2017.3.3 発行

《論文》

分県地図の草分け『大日本管轄分地図』について (1)

—「島根県管内全図」を中心として— …………… 船杉 力修 4

《報告》

「松江が生んだ美術史家・相見香雨

～九州大学文学部所蔵『自筆調査録』展」実施報告…………… 村角 紀子 39

河本家古典籍のデジタル化プロジェクト…………… 昌子 喜信 59

第1回中日若手科学技術担当者交流計画に参加して…………… 佐藤 陽子 75

《自著紹介》

出雲国誕生…………… 大橋 泰夫 83

日本におけるメディア・オリンピックの誕生…………… 浜田 幸絵 85

研修医のための臨床心エコー…………… 田邊 一明 88

《論文》

[縦組]

河本家の古典籍の全体像と特色…………… 原 豊二 104

分県地図の草分け『大日本管轄分地図』について(1)

—「島根県管内全図」を中心として—

島根大学法文学部社会文化学科准教授 船 杉 力 修

1. はじめに

本稿は、明治中・後期から大正期にかけて発行された、民間地図の一つで、分県地図の草分けとされる『大日本管轄分地図』のうち「島根県管内全図」を中心に取り上げ、近代の地図史のなかでの意義について検討するものである。

明治期は近代的な測量法に基づいて作製された地図が相次いで発行された時代であった。その結果、国民に対して、正確な地理的認識が急速に普及、拡大することとなった。明治期の地図のなかでも注目されるのは、①陸地測量部による地形図、水路部による海図¹⁾、②学校教科書（地図帳）²⁾、③民間地図であると考えられる。

①は、特に陸地測量部により、伊能図や内務省地理局・府県庁製の地図などをもとにして作製した輯製20万分1図の発行、基本図としての5万分1地形図の整備などが行われてきた。わが国の政府機関がいかに国土を正確に把握し、地図化していく過程は、地図史のなかで最重要の課題であるということと言うまでもない。②は初等教育や中等教育において地理教科書に付属する地図帳が相次いで発行された。地理教育の普及とともに、正確な地理的認識が学校教育を通じて、児童・生徒に対して実施されたことは、それまでの時代と比較しても画期的なことであったといえる。

③は、陸地測量部や水路部といった政府機関だけでなく、明治期以降も民間の知識人、出版社等が相次いで地図を作製・発行した。地図は現在でも図書館では消耗品扱いされているものの、そうした地図の一部が図書館・博物館等に多く所蔵されていることから、当時多く出回り、国民に対して、地理的認識の普及に大きな影響を与えたと考えられる。しかしながら、これまでの地図史研究では、個別具体的な地図の検討が行われてきたものの、民間地

図を系統的、悉皆的に押さえたものはほとんどなく、またその地図の成立過程、記載内容の検討、そしてその社会的な影響等を押さえた研究はほとんどみられない。これは、従来の研究では、公的地図の作製過程について重点的に研究されてきたことによるものと考えられる。しかしながら、わが国の近代の正確な地理的認識の拡大過程を押さえるためには、公的地図のほか、教科書（地図帳）や民間地図なども踏まえる必要がある。

そうした状況下で大きな示唆を受ける研究としては、元筑波大学教授の黒崎千晴、筑波大学教授の小口千明による『地図でみる県の移り変り 解説資料篇』の解説³⁾である。それによれば、①『地図でみる県の移り変り』において「『分県地図帳』を中心に復刻する主眼は、廃藩置県から一一〇年余、いわゆる日本近代化の展開とともに、全国各府県がどのように変化して来たのであるかを、新旧の地図類を比較・対比することによって把握しようというところにある」こと、②地図帳の復刻にあたって「その大半が政府や府県などの公刊した地図類のそれではなく、一般の民間刊行の地図帳の復刻を主としている」とし、本稿で対象とする明治中・後期から大正期の地図では、1916(大正5)年雄文閣発行の『大日本分県地図』を取り上げていること⁴⁾、③分県地図帳は「その編集方針や印刷技術の面では、時代の推移とともにさまざまな変化が明らかで」、「明治期刊行のものは、当初各府県単位で一枚の地図として刊行・分売というのが一般的で」、「後になって一冊の地図帳としてまとめられた」こと、④「政府諸機関が製作した地図帳は、政策立案や国防上の観点に主力をおくものに対して、民間刊行の地図や地図帳は、日常の一般的業務あるいは観光、旅行などの需要を対象として来たものと把握される」ことが指摘されており、近代の民間地図の概要を知る上で興味深い指摘がなされている。特に①や③の観点から、民間地図の特徴を捉える上では、まず分県地図を取り上げることに意義があるといえる。

明治期における分県地図については、日本古地図学会の佐藤達一郎の「明治初期のアトラス（分国図帖）について」⁵⁾が参考となる。佐藤は論文の終わりで「明治期のアトラス・分国図帖及び県別地図帖目録稿」を提示した。それによれば、明治前期には旧国ごとの地図帳である分国地図帳が中心であったのが、明治後期には府県の地図帳である分県地図帳が多くなっていることが確認できる。また、分県地図帳として、黒崎・小口が採用した『大日

本分県地図』よりも、『大日本管轄分地図』の方が10年以上も古く発行されていることから、地図史の立場からすれば、分県地図の草分けとして、まず『大日本管轄分地図』の意義について検討する必要があるといえる。

本学附属図書館では、人文社が人文社蔵版を1968（昭和43）年2月に復刻した『日本地図選集 三都市・四十三県・三府一庁 大日本管轄分地図』（本館・1階書庫291.038/N71）と、『大日本管轄分地図』付録として発行された『市町村新旧対照一覧』の1899（明治32）年9月発行の訂正第5版（本館・書庫4階階範291.03/N37）、1900（明治33）年訂正再版の『三府一庁四十三県三都市 大日本管轄分地図 附録市町村新旧対照一覧』（附録欠）（研究室290.38/D25）を所蔵している。

この地図は、人文社発行の観光ガイドブック『郷土資料事典：観光と旅』など種々の書籍で引用されていることから、著名な地図であるにもかかわらず、管見の限り、地図史のなかでは、1968（昭和43）年人文社復刻『日本地図選集 三都市・四十三県・三府一庁 大日本管轄分地図』にしか解説がみられない。わが国の近代の地図史研究において、これまで民間地図がほとんど注目されてこなかったことを如実に反映していると考えられる。

冒頭の人文社社長近藤源一による序文では次のように記している。「明治も中期の二十年代に入っては、建国の自信大いに伸ぶるところあり、諸制その緒につき、憲法の発布、近代的な律令の定、内国の充実、国外への勢威の伸張は、ついに日清事変に及んだ。「大日本管轄分地図」がこの事変の明治二十七・八年と時を同じくして発行されたのも、当時の国情を推する一斑のものであろう。わが社が「日本地図選集」の第五巻を刊行するに「大日本管轄分地図」（改正新市町村名・管内巡覧記）を選するに至ったのもまたこれに倣う自信の一片に他ならない。この管轄分地図は今日一般に行われている分県地図の草分けと云えよう。構図の確か、克明に彫刻された主版の鮮明且つ精巧なる出来ばえ、内容の精確明細、彩色の妙美、なかなかに見事である。刊行に当られた明治の先人たちの自信と誇りが五十篇の図葉に溢れる思いである。当時近代的技術と方式をもってする地図文化開拓の気概と意気に燃えて為された一大快挙であり、且つ営営苦心の鴻業と申すべきで、これが民間人によって果された意義は特筆に値する」⁶⁾とある。

また、日本地図選集刊行委員（代表）、民間学者、コレクターであった喜

多川周之（きたがわかし、1911～1986）⁷⁾の解説によれば、明治中期までの政府による地図製作の過程をふまえた上で、「本図に描かれているケバス地形表現は、この年制定をみた陸地測量部の、二十八年図式から姿を消してはいるが、この時代に県名を記した地図は少く、読物風の地誌を付した編集者の意慾は、高く評価されたのであろうか、大正初年にかけて版を重ねている。印刷様式は銅版彫刻を転写した石版刷に、色彩を木版の手摺で加えたもので、この期に民間から刊行された、多くの地図にみられる手法であるが、この歩みの足跡を辿ることは、興味の宿題であろう」⁸⁾と記している。

両者の見解をまとめると、『大日本管轄分地図』は、わが国の分県地図の草分けであること、地図内容が正確・明細で、彩色が美しいこと、地図の裏に読み物風の地誌を付していること、大正初年まで版を重ねていることなどを挙げている。しかしながら、この復刻版では「内容の精確明細」などの地図の具体的な内容の検討がなされていない。大正初期まで版を重ねていたということは、約20年版を重ねていたということとなり、わが国の民間地図のなかでもかなり売れて、国民への正確な地理的認識の拡大に大きな影響を与えたと考えられる。また、陸地測量部作製・発行の輯製20万分1図や5万分1地形図などは、府県界や市町村界に関係なく、区画ごとに発行されたのに対して、『大日本管轄分地図』といった分県地図は、府県ごとに1枚ずつ発行されたというのも大きな特徴であると考えられる。さらに、『大日本管轄分地図』のなかで、特に「島根県管内全図」を取り上げるのは、本学が島根県内にあるということもさることながら、その意義としては、①近世・近代・現代を通じて、斐伊川河口の流路変更といった地形的な変化が顕著にみられること、②1896（明治29）年4月、島根県東部の郡のうち、八束郡と簸川郡が設置され、行政区域の変更がみられること、③明治40年代には、現在の山陰本線が島根県東部で開通すること、④1904（明治37）年まで、離島である隠岐島では町村制が未施行であったことなどが挙げられる。こうした特徴が地図上でどのように記載され、また版を重ねるごとに記載に変化がみられたのかが重要である。

なお、『淞雲』の編集方針の一つとして、大学図書館及び図書館資料についての調査・研究成果を掲載することとなっている。本稿では単に本学附属図書館所蔵の民間地図の読み取りを行うだけでなく、民間地図の位置づけを

明確化するために、書誌学的な観点で、明治中期の官報付録に掲載された「版權登録図書」の記載をあわせて検討することとする⁹⁾。「版權登録図書」には、公的地図、教科書地図、民間地図が掲載されているが、これまでの地図史研究ではほとんど検討されたことはない。こうした分析作業が近代の民間地図の研究での基礎的な作業になると考えられる。

注

- 1) 測量・地図百年史編集委員会編『測量・地図百年史』、日本測量協会、1970年。
海上保安庁水路部編『日本水路史：1871～1971』、日本水路協会、1971年など。
- 2) 中川浩一『近代地理教育の源流』、古今書院、1978年など。
- 3) 黒崎千晴・小口千明解説『地図でみる県の移り変り 解説資料篇』、昭和礼文社、1989年、pp.1-26。
- 4) この地図を採用した理由として、市町村制実施から約20年後、全国の市町村境域がほぼ安定化したこと、日露戦争後という日本の領域がもっとも拡大した時期の地図帳であることを挙げている。
- 5) 佐藤達一朗「明治初期のアトラス（分国図帖）について－『諸号大日本分国手鏡 全』を主として－」、日本地図資料協会編『月刊古地図研究百号記念論文集 古地図研究 附古地図集』、1978年、pp.150-153。
- 6) 日本地図選集刊行委員会・人文社編集部『日本地図選集 三都市・四十三県・三府一庁 大日本管轄分地図』、人文社、1968年。本文はそのまま引用した。句読点は適宜筆者が追加した。
- 7) 喜多川周之については、①東京都江戸東京博物館都市歴史研究室編『東京都江戸東京博物館調査報告書 第22集 喜多川周之コレクション』、東京都江戸東京博物館、2010年。②東京都江戸東京博物館都市歴史研究室編『東京都江戸東京博物館調査報告書 第26集 喜多川周之コレクション第2集』、東京都江戸東京博物館、2012年。①によれば、喜多川の収集した地図の総数は858点で、2009年11月現在の江戸東京博物館収集地図の1割を占めるという。
- 8) 前掲6) 解説。
- 9) 官報付録の「版權登録図書」を活用した研究として、例えば、金子一夫「小山正太郎・岡倉覚三らの褒賞画取調考」、茨城大学五浦美術文化研究所報13号、1991年、pp.1-20などがある。

2. 地図の構成

1894(明治27)年7月発行の「朝鮮輿地図」の編輯者は、『大日本管轄分地図』の編輯者と同じ、京都市上京区の清水常太郎である。「朝鮮輿地図」はケースに入っており¹⁰⁾、ケースの内側には、地図の発行者の一つである「大阪市南区心斎橋北詰四丁目八拾九番屋敷 中村鐘美堂」の広告が出ている【写真1】。この広告をみると、『大日本管轄分地図』の構成を知ることができる。右側には「朝鮮輿地図」の説明があり、左側には中村鐘美堂の地図・書籍のうち『日本管轄分地図』、『朝鮮地誌要略』、『支那地誌要略』の広告が出ている。このうち『日本管轄分地図』は「清水光憲先生著」とあり、清水光憲とは清



写真1 「朝鮮輿地図」ケースの広告（島根県竹島資料室寄託資料）

水常太郎を指している。『朝鮮地誌要略』、『支那地誌要略』は「松本謙堂著」としている¹¹⁾。広告にある『日本管轄分地図』とは、本稿で対象としている『大日本管轄分地図』を指しており、誤記である。実際、1894（明治27）年3月発行の『大日本管轄分地図』の「島根県管内全図」¹²⁾には、表題に「大日本管轄分地図」と記されている。本稿では、広告に出ている「日本管轄分地図」を以下、「大日本管轄分地図」と表記する。

まず、『大日本管轄分地図』の説明では次のように記している。「本図ハ大日本全国地方庁一管内毎ニ分割セシ図ニシテ、三府一庁四十三県、是ニ三都市街図ヲ加ヘ五十葉ヲ以テ全部トス、尤一管内毎ニハ地誌ニ於テ必要ナル山川・湖沼・港湾・灯台・岬角・海峡・島嶼・鉾山・温泉・瀑布・社寺・勝地・古跡・名邑・都市ハ勿論鉄道ノ線路及国道・県道・里道・改正新市町村名・大字ニ至ルマテ精密詳細漏ス事ナク記入ス、然ルニ旧町村大字ノ改称区域ヲ詳知セシムル為メ別ニ市町村新旧対照一覧ヲ添フ」

つまり、この地図は、大日本全国を地方庁一管内ごとに分割した地図で、東京・京都・大阪の3府、北海道庁、43県に、東京・京都・大阪3都市の市街図を加えて、50葉で全部としている。一管内ごとに、地誌に必要な山川・湖沼・港湾・灯台・岬角・海峡・島嶼・鉾山・温泉・瀑布・社寺・景勝地・古跡・有名な町・都市はもちろん、鉄道・国道・県道・里道、そして改正新市町村名や大字に至るまで精密詳細に漏らすことなく記入している。それにもかかわらず、旧町村大字の改称区域を詳しく知らしめるため、別に市町村新旧対照一覧を添えるとしている。

「改正新市町村名」とは、1889（明治22）年4月1日の市町村制実施以後の市町村名を指す。すなわち、『大日本管轄分地図』とは、地方庁の地図50葉と、その付録として、1889（明治22）年4月の市町村制実施前後の市町村名の新旧対照を記した『市町村新旧対照一覧』から構成されていたことが確認できる。広告には「全部、附録市町村新旧対照一覧共美麗カバン入」とあり、地図50葉と付録がセットで、カバンに入れられ、販売されていたことが分かる。本学附属図書館所蔵の1900（明治33）年訂正再版の『三府一庁四十三県三都市 大日本管轄分地図 附録市町村新旧対照一覧』は、付録が欠けているものの、地図50葉とともに、カバンの一部にあたる表題の部分が残っている【写真2】。地図は当時も現在も消耗品であり、地図自体が残ることが少ないが、



写真2 1900(明治33)年訂正再版の『大日本管轄分地図』と
カバンの一部(本学附属図書館所蔵)

カバンの一部まで残っているのは珍しいといえる¹³⁾。

なお、明治中期には、官報の付録に「版權登録図書」と「出版届出図書」が掲載されており、それにより当時の出版状況を確認することができる。1895(明治28)年3月25日の官報3517号付録の「版權登録図書」には、「二三四五二号、三月六日登録、市町村新旧対照一覧、著作及版權所有者大坂市中村芳松、五〇〇厘」(=50銭)¹⁴⁾とあり、『市町村新旧対照一覧』の版權が内務省に登録されたのは、地図の初版が発行された1894(明治27)年の翌年3月のことであったから、セット販売は1895(明治28)年3月から実施されたと考えられる。

【表1】は、1968(昭和43)年人文社復刻『日本地図選集 三都市・四十三県・三府一庁大日本管轄分地図』に収録された地図の発行年月、編輯者、発行者、印刷者をまとめたものである。文字が切れている地図もあるが、たいていの地図に、訂正増補として1895(明治28)年を載せ、その下限は宮城県の11月とあることから、この地図50葉は1895(明治28)年11月以降に明治28年訂正再版として発行されたものと考えられる。後述するが、「島根県管内全図」において、1894(明治27)年版と1895(明治28)年版を比較すると、後者に

表1 『大日本管轄分地図』（1895（明治28）年訂正増補版）の発行状況

番号	地名	発行年月	訂正増補年月	編輯者	発行者	印刷者	備 考
1	北海道	明治27年6月	明治28年6月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
2	青森県	明治27年6月	明治28年3月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
3	岩手県	明治27年6月	—	(清水常太郎)	(中村芳松)	(中田貞矩)	文字が切れている
4	秋田県	明治27年3月	—	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
5	山形県	(明治27年6月)	—	—	—	—	文字が切れている
6	宮城県	明治27年3月	明治28年11月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
7	福島県	明治27年6月	明治28年3月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
8	群馬県	明治27年6月	明治28年6月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
9	栃木県	明治27年6月	明治28年3月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
10	茨城県	明治27年7月	明治28年4月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
11	埼玉県	明治27年6月	明治28年9月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
12	東京府	明治27年6月	明治28年5月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
13	東京市	明治28年3月	明治28年2月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
14	千葉県	明治27年3月	—	—	—	—	文字が切れている
15	神奈川県	明治27年6月	明治28年5月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
16	山梨県	明治27年5月	明治28年5月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
17	新潟県	明治27年7月	明治28年5月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
18	富山県	明治27年6月	明治28年6月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
19	岐阜県	明治27年6月	明治28年3月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
20	長野県	明治27年6月	明治28年2月	清水常太郎	(中村芳松)	(中田貞矩)	文字が切れている
21	静岡県	明治27年5月	明治28年5月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
22	愛知県	明治27年3月	明治28年□月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
23	石川県	明治27年6月	明治28年3月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
24	福井県	明治27年6月	明治28年1月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
25	滋賀県	明治27年6月	明治28年6月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
26	三重県	明治27年6月	明治28年6月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
27	京都府	明治27年3月	—	—	—	—	文字が切れている
28	京都市	明治27年3月	明治28年2月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
29	奈良県	明治27年3月	—	(清水常太郎)	中村芳松	中田貞矩	文字が切れている
30	和歌山県	明治27年3月	明治28年6月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
31	大阪府	明治27年3月	明治28年6月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
32	大阪市	明治27年3月	明治28年6月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
33	兵庫県	明治27年3月	明治28年5月	—	—	—	文字が切れている
34	鳥取県	明治27年3月	明治28年5月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
35	島根県	明治27年3月	明治28年3月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
36	岡山県	(明治27年3月)	—	—	—	—	文字が切れている
37	広島県	明治27年3月	明治28年5月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
38	山口県	明治27年3月	明治28年6月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
39	香川県	明治27年3月	明治28年5月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
40	徳島県	明治27年3月	明治28年6月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
41	高知県	明治27年3月	明治28年6月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
42	愛媛県	明治27年3月	明治28年3月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
43	福岡県	明治27年3月	明治28年3月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
44	佐賀県	明治27年3月	明治28年4月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
45	長崎県	明治27年3月	明治28年5月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
46	熊本県	明治27年3月	明治28年9月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
47	大分県	明治27年3月	明治28年7月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
48	宮崎県	明治27年3月	明治28年5月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	
49	鹿児島県	明治27年3月	—	(清水常太郎)	(中村芳松)	(中田貞矩)	文字が切れている
50	沖縄県	明治27年3月	明治28年5月	清水常太郎	中村芳松	中田貞矩	

日本地図選集刊行委員会・人文社編集部編『日本地図選集 三都市四十三県三府一庁 大日本管轄分地図』、1968年より作成

注：年月の（ ）はCiNiiで調査した。

注：人名の（ ）は住所で名前を比定した。

は「島根県管内里程図」が加わるほか、市街図のうち、松江市・浜田町・西郷で、1892（明治25）、1893（明治26）、1894（明治27）年の人口が新たに記されている。訂正再版したことは事実であるといえる。

【表1】をみると「東京市図」と「大阪市図」のみ、1895（明治28）年3月発行としている。また、官報3530号附録の「版權登録図書」によると、23651号として、同年3月26日、「東京市図」、「京都市図」、「大阪市図」を挙げ、著作者は京都市清水常太郎、版權所有者は大阪市中村芳松としている¹⁵⁾。こうしたことから、『大日本管轄分地図』の広告が掲載された1894（明治27）年7月の時点では、地図50葉のうち、東京市・京都市・大阪市と付録である『市町村新旧対照一覧』がまだできあがっておらず、翌年3月以降にようやく発行、販売されたと考えられる。

本学附属図書館所蔵の『市町村新旧対照一覧』は1899（明治32）年9月発行の訂正第5版であるが、表紙には、「大日本管轄分地図附録」と記されている【写真3】。また、『市町村新旧対照一覧』の1895（明治28）年3月発行の初版においても、「大日本管轄分地図附録」¹⁶⁾とあり、地図の付録であったことが本の表紙からも確認することができる。

「朝鮮輿地図」のケースに出ている『大日本管轄分地図』の広告では、続けて次のような記載がある。「偕又裏面ニハ府県都市何レモ各其沿革、管轄、区域、位置、境界、広袤、面積、地勢、区画、市、郡、町、村、戸数、人口ニ至ルマデ総論ニ於テ之ヲ尽シ、次ニハ先ヅ県庁所在ノ市或ハ町ヨリ路順ヲ以テ諸郡ヲ巡リ、其終ニハ最初出デタル県庁地ニ還ル如クシ、而シテ各市郡ノ下ニハ先ヅ郡役所等アル名邑ニ着シ、其地ニ於テ郡中巡回ノ針路、来歴、山川、道路、都邑等要ヲ摘シテ文ヲ示シ其終ニハ何レモ著名ナ物産ヲ示シ、次郡へ移ルガ如ク編纂セリ、是レ所謂簡ニシテ要ヲ脱セザル良図書ナリ、之ヲ披キテ一覧セバ、宛然其地ヲ歩ムガ如キ感ヲ為スガ故、使用他ニ



写真3 『市町村新旧対照一覧』表紙
（第5版、本学附属図書館所蔵）

比類ナキノ高評ヲ得タリ、請フ試ニ各地書店ニ於テ一葉購覽アリテ其至レルヲ知り給ハンコトヲ」

すなわち、さてまた、裏面には、府県・都市いずれもそれぞれの沿革・管轄・区域・位置・境界・幅と長さ・面積・地勢・区画・市・郡・町・村・戸数・人口に至るまで総論においてこれを説明し尽くし、次に、まず県庁所在地のあるいは町から道順で諸郡をまわり、その終わりには最初出発した県庁所在地へ帰るようにして、それから各市郡のところでは、まず郡役所等がある有名な町に着いて、その地において郡中巡回の針路・来歴・山川・道路・都邑等要点を摘出して文章を示して、その終わりにはいずれも著名な物産を示して、次の郡へ移るように編纂した。これはいわゆる手軽であり、要点が抜け落ちていない良書である。これをひらいて一覧すれば、そのままその地を歩いたような感じがするので、その便利さは、他に比較するものがないとの高評を得ている。試しに各地の書店で一葉を購入、閲覧して、それが申し分ないことを知って下さることを願う、とある。

国立国会図書館東京本館地図室所蔵の1894（明治27）年3月発行の「島根県管内全図」の初版は、翌年の1895（明治28）年の訂正再版とは異なり、地図には彩色がなく、白黒で、裏面には、この地図の売りの一つである、地誌の記載がみられないとのことであった¹⁷⁾。訂正再版では、「島根県管内巡覧記」¹⁸⁾として、まず「松江市ヨリ管内各地ヘノ里程一覧」と「管内諸街道起達經由地及道程一覧」が表で示され、次に「総論」、「松江市」、そして出雲国の「意宇郡」から、隠岐国の「穂地郡」まで順に全20郡の説明がある。最後の「穂地郡」の終わりには、「いでや巡りて此港に還り乗船して出雲の加賀港に着し、夫より松江に帰らむ」とあり、再び県庁所在地の松江市に戻る記載のあることが確認できる。詳細は後述するが、喜多川周之の解説にもあったように、裏面の地誌、すなわち管内巡覧記の記載は、当時他の地図にはないので、この地図の特徴の一つであるといえる。それが当時の広告に詳細に記されていることが注目される。

なお、私蔵本のなかには、1894（明治27）年発行の『大日本管轄分地図』のうち、「和歌山県管内全図」と「佐賀県管内全図」がある。地図を入れた袋があるということで、2016（平成28）年秋東京都内の古書店から入手した。消耗品である地図では、先ほどのカバンの一部と同様、袋の存在は珍しく、

貴重なものである。袋をみると、両者若干デザインが異なるが、上部には、「改正新町村名」、「大日本管轄分地図」、「〇〇県」とあり、中央には山を描き、下部には出版社である大阪の「鐘美堂」が出ている【写真4・5】。

袋の裏には、両者とも『大日本管轄分地図』の説明が出ている。説明は、「朝鮮輿地図」のケースの内容を少し圧縮したものである。説明の末尾には「本

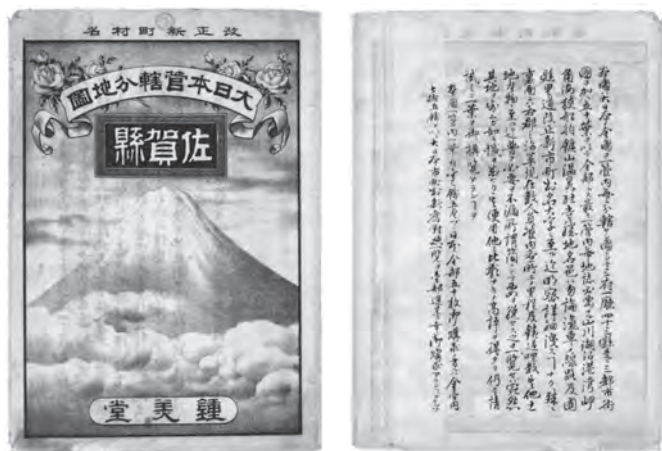


写真4 1894（明治27）年3月5日発行「佐賀県管内全図」の袋
（著者蔵）



写真5 1894（明治27）年3月19日発行「和歌山県管内全図」の袋
（著者蔵）

図一管内一葉ニ付金三錢五厘ヅゝ、日本全部五十枚御購求ノ方へハ金壹円七拾五錢ヲ以テ、大日本市町村新旧対照一覧ヲ壹部進呈ス、幸御購求アラン事ヲ乞フ」とある。この袋は一府県の地図1葉を購入する際に付いているものであり、地図1葉の価格は3錢5厘であった。まだこの時点では50葉全てと『市町村新旧対照一覧』は発行されていないものの、地図50葉全部を1円75錢で購入すれば、付録の『市町村新旧対照一覧』が進呈されるとある。特定の府県の地図1葉を購入した客に、全国50葉全ての地図の購入も勧めていることが確認できる。3錢5厘の価格は後年の訂正再版でも維持されたようで、管見の限り、1909（明治42）年版「福島県管内全図」（著者蔵）でも「定價金三錢五厘」と記されている。

和歌山県の袋には、同じく中村鐘美堂が当時発行した、『教科適用大日本新地図地理統計表』及び『教科適用萬国新地図地理統計表』の2冊の地図帳もあわせて紹介されている。これは後述するが、小学校用の地図帳であり、版を重ねており、当時好評であったとみられる。

表面の地図には、両者ともすでに初版の段階で彩色がなされ、裏面には地誌、管内巡覧記が記されている。1895（明治28）年の訂正再版と比較すると、先ほどの「島根県管内全図」と同様、県管内里程図が加わっている。和歌山県では、訂正再版には、市街図のうち、和歌山市と新宮町で、1892（明治25）、1893（明治26）、1894（明治27）年の人口が新たに記されている。佐賀県では、佐賀市・唐津町・伊万里町で人口が新たに記されている。さらに、初版では、九州鉄道（現在長崎本線、佐世保線）が佐賀駅までであったのが、訂正再版では、武雄駅（現在武雄温泉駅）まで伸びている。これは1895（明治28）年5月に武雄駅が開業したことを反映している。民間地図であるにもかかわらず、わずか1年あまりで、地図の内容を確実に更新していることが注目される。地図の精度が高いと言われる根拠の一つであると指摘できる。

注

- 10) 島根県竹島資料室寄託資料（書籍372）。1894（明治27）年8月6日の官報3331号付録の「版權登録図書」には、「二〇八三九号、六月三十日登録、朝鮮輿地図、著作及版權所有者大阪市清水常太郎、三五〇厘」（＝35錢）とあり、「朝鮮輿地図」は、著作者の清水常太郎が版權を有していたことが確認できる。内閣官房局『官報』3331号付録、p.2。

- 11) 松本謙堂は本名を松本仁吉という。国立国会図書館デジタルコレクションを検索すると、明治20年代に、大阪市内、京都市内に居住し、『各国憲法参照 日本憲法註釈』、『参照法令類聚 大日本六法全書』、『教育勅語正解』、『教育勅語之唱歌』、『家庭教育 日本忠臣美談』、『家庭教育 日本孝子美談』、『家庭教育万国歴史はなし』、『普通教育 高等作文教科書』、『鼈頭字義訓解 唐詩選講義』、『日清韓三国対照会話篇』、『初等平面幾何学教科書 問題解式』など多くの著作を残しており、地理学のほか、法学、教育学、歴史学、漢文学、中国語、朝鮮語、数学など幅広い分野にわたっている。地理学関係では、『支那地理』、『実地踏測台湾詳密地図』、『附録台湾島地誌撮要』、『旅行錦囊日本漫遊案内』、『露西亜之大勢 附英仏独三国形勢』のほか、学校で使用された地図帳『教科摘要袖珍万国地図』の翻訳も行っている。「実地踏測台湾詳密地図」は、1895（明治28）年2月発行、英国前海軍大尉ジョン・ウオートルが原製図者、編輯者が清水常太郎で、直訳者として「謙堂松本仁吉氏」（大阪市東区谷町）が出ている。当時の知識人の一人であったと考えられるが、『各国憲法参照 日本憲法註釈』において「奈良県平民」とあるのみで、履歴等は不明である。
- 12) 国立国会図書館東京本館地図室所蔵。
- 13) 新日本古地図学会のホームページでは、カバン入りの1897（明治30）年再版の『大日本管轄分地図』の写真が公開されている。カバンとともに、地図50葉と付録が一式で残っており、極めて貴重な資料であるといえる。新日本古地図学会ホームページ<http://blog.goo.ne.jp/kochizu/e/044db8546b6216d0da5150d46c43dcd>b（2016年12月10日閲覧）
- 14) 内閣官房局『官報』3517号付録、p.4。
- 15) 内閣官房局『官報』3530号付録、1895（明治28）年4月10日、p.3。なお、「京都市図」における地図上の発行年の記載と官報の記載とのずれについては今後の課題としたい。
- 16) 東京大学農学生命科学図書館所蔵及び国立国会図書館デジタルコレクションの初版本を参照した。
- 17) 国立国会図書館利用者サービス部複写課遠隔複写係からの情報による。国立国会図書館では、この地図は「大日本管轄分地図 山陰道之部」で登録されており、そのなかに「鳥取県管内全図」と「島根県管内全図」の2枚が入っている。1894（明治27）年4月18日の官報3237号付録の「版權登録図書」では、19816号、1894（明治27）年3月28日登録、「大日本管轄分地図 山陰道之部」（2枚）、著作者京都市清水常太郎、版權所有者大阪市中村芳松、70厘（＝7銭、1枚3銭5厘）と記されている。内閣官房局『官報』3237号付録、p.3。「島根県管内全図」に彩色がなく、裏面に地誌の記載がない点については今後の課題としたい。
- 18) 「〇〇県管内巡覧記」という表記は、1968（昭和43）年復刻にあたって、編集者が名付けた呼称であるとみられ、現在でいう「案内記」という意味であると考えられる。

3. 『市町村新旧対照一覧』の凡例にみる地図の編纂理由と効用

『大日本管轄分地図』の付録として発行された、1895（明治28）年3月発行の『市町村新旧対照一覧』の凡例には、「編纂ノ理由」、「本書ノ効用」が出ており¹⁹⁾、それを見ると、地図発行の理由・効用を推定することができる。

まず、編纂の理由として、「本書ハ専ラ官民ノ便ニ供センガ為メ全国府県庁ノ位置、管轄区域及ヒ郡区市町村名ヲ政府刊行ノ官報ニ拠テ編纂シタルモノニシテ尚ホ不明ナル所ハ実地調査ヲ遂ケ以テ完成セシモノナリ」とある。すなわち、この本は官民の便に供するため、全国の府庁の位置、管轄区域、郡区市町村名を、政府刊行の官報により編纂したもので、なお不明な所は実地調査を遂げて完成したものであるとしている。『大日本管轄分地図』では、このような編纂の理由が一切記されていないが、この本とともにセットで編集・発行・販売された地図は、本に記された位置を示すものであることから、本の編纂理由は、地図編纂の理由につながるといえる。つまり、政府刊行の官報などによって、自前で調査した、新市町村の位置・名称、管轄区域を入れた地図を作製し、不明な点は実地調査で作製したと考えられる。

本の表紙には、発行者として中村鐘美堂が出ている。本の奥付には、編輯兼発行者として「大阪市南区末吉橋通四丁目八十九番邸 中村芳松」と出ている。一方、『大日本管轄分地図』では、編輯者として「京都市上京区室町通上立売ル室町頭町四六番戸 清水常太郎」、発行者として、先に同じ中村芳松が出ている。すなわち、この地図を編集したのは、京都の清水常太郎、地図の発行と『市町村新旧対照一覧』の編集・発行したのが大阪の中村芳松（中村鐘美堂）、つまり、清水常太郎と中村芳松との二人三脚によって、『大日本管轄分地図』の発行が実現したことが確認できる。

次に、本書の効用として、「例ヘハ茲ニ某地図ヲ展テ某村現今ノ字即チ旧村名ヲ索メントセンカ該図中余地ナキノ故ヲ以テ総称村名ノミヲ記シ字ヲ載セザルコト往々ニシテ然リ、此時ニ方リ本書ヲ繙閲セハ一目ノ下ニ索ムル所ノ字ヲ知ルノ便アリ是レ本書ヲ地図ニ添付スルノ理由ナリ」とある。すなわち、例えば、ここに某地図を開いて、某村、現在の字名、つまり、旧村名を探そうとすると、該当の地図中にあいている場所がないので、総称村名のみを記して、字名を載せないことが往々にしてある。こうした時に本書を読み

調べれば、一目のもとに探そうとしている字名を知る方法がある。これが本書を地図に添付する理由であるとする。編纂の理由同様、本書の効用は、本書の位置を示す地図の効用につながる。

後述するが、1889（明治22）年制定の新町村名を示す公的地図は当時発行されていなかった。そうしたなかで、新町村名を記した地図を民間機関が発行したのは画期的であったといえる。また、本書の効用にあるように、当時の民間地図でも、当時の字名、すなわち、旧村名、多くの場合、江戸時代の藩政村を探す場合、総称の村名、すなわち、1889（明治22）年以降の新町村名しかないことが多かった。そうした時に本書及び本地図をみれば、字名、すなわち旧村名を知ることができるというのである。すなわち、新旧対照一覧によって、旧村の地名の存在を確認でき、その上で、地図によって位置を知ることができた。つまり、『大日本管轄分地図』は付録の新旧対照一覧を活用することによって、新旧両方の地名を確認することができるという点も特徴であったのである。

【写真6】は、『市町村新旧対照一覧』のうち、p.264の島根県の一部、出雲国の松江市・島根郡・秋鹿郡・意宇郡・能義郡・仁多郡・大原郡（一部）の部分を示したものである。特に郡部では、上部に新町村名、下部に旧町村名が出ており、新旧の地名を容易に対照することができる。1889（明治22）年に意宇郡来海村として成立した来海村は、1895（明治28）年の初版では、来待村となっている。これは、1893（明治26）年7月9日、意宇郡来海村は来待村に改称した²⁰⁾ことを反映している。また、本学附属図書館所蔵、1899（明治32）年9月発行、訂正第5版のp.264では、島根郡・秋鹿郡・意宇郡が消え、八束郡となっている【写真7】。また島根郡のところに、八束郡が記され、意宇郡・秋鹿郡の表記の部分が空白になっていることが確認できる。これは1896（明治29）年4月1日、意宇郡・島根郡・秋鹿郡を廃し、八束郡を置く²¹⁾ことに対応した表記である。すなわち、市町村合併を記した、政府刊行の官報の記載をもとに、本が修正されたことが、島根県内の記載を検討しても確認することができる。

注

19) 前掲16)。なお、本学附属図書館所蔵、1899（明治32）年9月発行、訂正第5

萬根縣
 第一村 萬根縣第一村
 第二村 萬根縣第二村
 第三村 萬根縣第三村
 第四村 萬根縣第四村
 第五村 萬根縣第五村
 第六村 萬根縣第六村
 第七村 萬根縣第七村
 第八村 萬根縣第八村
 第九村 萬根縣第九村
 第十村 萬根縣第十村

萬根縣
 第一村 萬根縣第一村
 第二村 萬根縣第二村
 第三村 萬根縣第三村
 第四村 萬根縣第四村
 第五村 萬根縣第五村
 第六村 萬根縣第六村
 第七村 萬根縣第七村
 第八村 萬根縣第八村
 第九村 萬根縣第九村
 第十村 萬根縣第十村

萬根縣
 第一村 萬根縣第一村
 第二村 萬根縣第二村
 第三村 萬根縣第三村
 第四村 萬根縣第四村
 第五村 萬根縣第五村
 第六村 萬根縣第六村
 第七村 萬根縣第七村
 第八村 萬根縣第八村
 第九村 萬根縣第九村
 第十村 萬根縣第十村

萬根縣
 第一村 萬根縣第一村
 第二村 萬根縣第二村
 第三村 萬根縣第三村
 第四村 萬根縣第四村
 第五村 萬根縣第五村
 第六村 萬根縣第六村
 第七村 萬根縣第七村
 第八村 萬根縣第八村
 第九村 萬根縣第九村
 第十村 萬根縣第十村

萬根縣
 第一村 萬根縣第一村
 第二村 萬根縣第二村
 第三村 萬根縣第三村
 第四村 萬根縣第四村
 第五村 萬根縣第五村
 第六村 萬根縣第六村
 第七村 萬根縣第七村
 第八村 萬根縣第八村
 第九村 萬根縣第九村
 第十村 萬根縣第十村

萬根縣
 第一村 萬根縣第一村
 第二村 萬根縣第二村
 第三村 萬根縣第三村
 第四村 萬根縣第四村
 第五村 萬根縣第五村
 第六村 萬根縣第六村
 第七村 萬根縣第七村
 第八村 萬根縣第八村
 第九村 萬根縣第九村
 第十村 萬根縣第十村

萬根縣
 第一村 萬根縣第一村
 第二村 萬根縣第二村
 第三村 萬根縣第三村
 第四村 萬根縣第四村
 第五村 萬根縣第五村
 第六村 萬根縣第六村
 第七村 萬根縣第七村
 第八村 萬根縣第八村
 第九村 萬根縣第九村
 第十村 萬根縣第十村

萬根縣
 第一村 萬根縣第一村
 第二村 萬根縣第二村
 第三村 萬根縣第三村
 第四村 萬根縣第四村
 第五村 萬根縣第五村
 第六村 萬根縣第六村
 第七村 萬根縣第七村
 第八村 萬根縣第八村
 第九村 萬根縣第九村
 第十村 萬根縣第十村

萬根縣
 第一村 萬根縣第一村
 第二村 萬根縣第二村
 第三村 萬根縣第三村
 第四村 萬根縣第四村
 第五村 萬根縣第五村
 第六村 萬根縣第六村
 第七村 萬根縣第七村
 第八村 萬根縣第八村
 第九村 萬根縣第九村
 第十村 萬根縣第十村

萬根縣
 第一村 萬根縣第一村
 第二村 萬根縣第二村
 第三村 萬根縣第三村
 第四村 萬根縣第四村
 第五村 萬根縣第五村
 第六村 萬根縣第六村
 第七村 萬根縣第七村
 第八村 萬根縣第八村
 第九村 萬根縣第九村
 第十村 萬根縣第十村

写真6 『市町村新旧対照一覧』（1895（明治28）年）p.264島根県の一部
（国会図書館デジタルコレクションより転載）

[illegible]

写真7『市町村新旧対照一覧』（1899（明治32）年）p.264島根県の一部
（島根大学附属図書館所蔵）

版の凡例もほぼ同じ記載があるが、本書の効用で「是レ本書ニモ府縣市毎ニ地図ヲ添付スルノ理由ナリ」と記し、府縣市ごとに地図を添付することを強調している。

- 20) 島根県地域振興部市町村課編『島根県の地名鑑 第9次改訂版』、島根県地域振興部市町村課、p.7。島根県庁地域振興部市町村課ホームページhttp://www.pref.shimane.lg.jp/admin/sichoson/sichoson_info/sanko/index.data/chimeikanvol.9.5.pdf (2016年11月29日閲覧)

- 21) 前掲20)。

4. 発行者中村鐘美堂について

【表1】をみると、いずれも発行者は大阪の中村芳松（中村鐘美堂）、印刷所は大阪の中田貞矩（中田印刷所）となっている。

中村芳松（由松、1853～1915）の来歴については、中田印刷所の歴史について記した、1953（昭和28）年発行の『聖山中田先生伝』に簡潔に出ている²²⁾。「鐘美堂書店は中村由松氏の経営するところであつた。由松氏は大和奈良の出身である。立身成功の希望を抱いて大阪に來りしは、氏が十三歳の時である。初め御堂筋の書肆福岡屋に丁稚として住込み、商業を見習いしが、常に恪勤精励、長ずるに及び独特の商才を発揮して主家の為め図るところ多大であつた。當時天満鳴海町の書肆中村儀兵衛氏は商業上の事より時々福岡屋に出入せしが、由松氏の非凡なる才能と常に主家を思い、奮闘努力を惜しまざる態度に強く感動し、福岡屋の諒解を得、親元に由松氏を婿養子として貰い受けたき旨を懇請し、由松氏またこの旨を承諾し、こゝに由松氏は將來中村家の相続人として同家に入りしは氏が二十一歳の時であつた。由松氏を迎えた鐘美堂はその後隆々と栄えた。由松氏は家督相続後心齋橋北詰に店舗を移し、こゝにて書籍地図類の卸兼小売業を開始した。當時各印刷所共規模大ならず、中村氏の意のまゝに出版事業は進まなかつた。依て中村氏は別に印刷工場を設けて意のまゝに自己の計画せる書籍を出版せんと企図しつゝ、ありしが、たまたま中田印刷所の生産能力の大なるを知り、またその印刷物の優美なるを見て、同店の印刷物を中田印刷所に託することゝなつた」とある。

さらに、1915（大正4）年7月の日本印刷界社発行の雑誌『日本印刷界』69号には、中村芳松（由松）の訃報記事が出ている²³⁾。中村由松は大阪で製紙事業、出版印刷事業の開拓者として活躍したとされ、記事のなかの出版印

刷事業の説明に、地図の記載がある。「氏は又石版印刷術に先鞭を着けた。其当時小学校児童用地図の発行を機とし、当時の中田印刷所と提携して石版ミシンを購入した。それを使ふて地図を印刷してから地図は鐘美堂に限るとの評判がパツと立ち世の信用も高まった。其後或る高貴の方から朝鮮の大家金玉均氏が著した朝鮮大地図を縮刷せよとの勧めから、之に着手した。が間もなく二十七・八役がオツ始まり思ひもそめぬ幸運を迎へ、十数万枚を売尽したのみならず、清国地図も亦数十万枚を売尽した。是全く石版印刷の賜で、中田印刷所も亦同慶に浴して大利益を博したのは云ふまでもない」とある。

中村芳松は、石版印刷術を導入し、小学校用の地図帳を発行した。これは、1892（明治25）年5月、中村芳松（中村鐘美堂）発行の『教科適用 大日本新地図 地理統計表』²⁴⁾であると考えられる。地理教育が専門で、大阪女子商業高校元教諭の田中耕三によれば、統計地図の説明のなかで「小学校の地図帳の統計表の初見は山根秋里の『大日本新地図』である」²⁵⁾としている。1895（明治28）年6月の増補第1版²⁶⁾をみると、1894（明治27）年12月の時点で訂正18版となっており、この地図帳は当時よく売れており、学校で使用されていたとみられる。また、増補第1版には、著者の山口県人で、当時大阪市東区に寄留していた山根秋里（丑蔵）のほか、校閲者として大阪師範学校（現在大阪教育大学）教頭の久保田貞則と、訂正者として、後に『大日本管轄分地図』の編者として出てくる後藤常太郎の名前が加わっていることが注目される。管見の限り、この『教科適用 大日本新地図 地理統計表』は、1897（明治30）年7月には訂正増補第11版²⁷⁾、1906（明治39）年10月大改正増補第1版²⁸⁾が確認されることから、1895（明治28）年以降、少なくとも12年にもわたって販売されていたことが確認できる。それほど中村鐘美堂の地図帳は教育現場で好評を博していたといえる。

次に「其後或る高貴の方から朝鮮の大家金玉均氏が著した朝鮮大地図を縮刷せよとの勧めから、之に着手した」というのは、直接的には、先に述べた1894（明治27）年7月発行の「朝鮮輿地図」を指すと考えられる²⁹⁾。「朝鮮輿地図」ケース内側のうち右側にある、「朝鮮輿地図」の説明には、次のような記載がある【写真1】。「此図ハ前年金玉均氏カ本国ヲ去ル時携帯シ来レル彼邦無二ノ明細分間大絵図ニシテ、氏生前姑クモ座ヲ離サズリシガ、先般上海ニ航スルニ及テ、何思ケン当地ノ或貴顕ノ方ニ遣シ置ケリシヲ、時事

ニ感ズル所アリ、乞テ之ヲ縮写シ、図中八道・諸州・府県郡・兵營・水營・諸鎮・名勝・名邑・山川・岬角・港湾・島嶼ノ位置一見掌ヲ指スガ如シ、彼レ曾テ国力ヲ以テ調査シタルモノ、之ニ加フルニ便覧ノ為メ、京城・元山津・釜山浦・仁川・漢江等附近ノ箇所五区ニ分チ、特ニ切図トナシ、尚京城ヨリ諸名区ニ至ル里程表ヲ加エ、併セテ図ノ縁邊ニ附記セリ坊間往々朝鮮図アルモ未タ如此モノ有ラズ、実ニ天下無比ノ明細図也、弊堂聊カ報國ノ心ヲ以テ、務メテ廉価ヲ旨トシ、内国人士ニ頒タント欲ス、乞フ各所ノ書店ニ就テ購覽アラン事ヲ」³⁰⁾

すなわち、朝鮮独立党の指導者である金玉均が前年（1893（明治26）年）本国を去る時に携帯してきた朝鮮の地図は、詳細で距離を記した大絵図で、金玉均は生前少しの間も座右を離さなかったが、先般（1894（明治27）年3月23日）神戸港から上海へ渡航するに及んで、何を思ったのか当地の高貴の方に遣わしおいたのを、時事に感じるところがあり、お願いしてこれを縮写したものであるとしている。金玉均はその後3月28日上海で暗殺された。中村鐘美堂はこの朝鮮地図を縮刷したところ、まもなく日清戦争が始まり、思いも染めない幸運を迎えて、10数万枚を売り尽くしたのみならず、その後出版した清国地図もまた数十万枚を売り尽くした。これは全く石版印刷の賜物で、中田印刷も同慶に浴して大利益を博したのは言うまでもないとしている。

「朝鮮輿地図」が発行されたのは7月1日であるが、大阪朝日新聞では、7月4日朝刊5面にすでに広告が出ている。「韓客朴泳孝題字、清水光憲編纂」とあり、同じく独立党で活躍した朴泳孝の題字を宣伝しているほか、編者の清水光憲（常太郎）の名前も出していることが確認できる³¹⁾。翌7月5日5面にも「朝鮮輿地図」の広告があり³²⁾、上記の「朝鮮輿地図」ケース内側にある説明がそのまま引用されている。7月5日の広告で初めて金玉均の名前が登場したこととなる。金玉均暗殺事件は当時わが国で大きく報道されたことから、「朝鮮輿地図」は読者に対して大きく注目されたと考えられる。

【図1】は、官報付録に掲載された「版權登録図書」により、日清戦争前後の1894（明治27）年から1895（明治28）年の間に発行された朝鮮・清国関係の地図を月ごとに整理したもの、【表2】は、そのうち日清戦争開戦前後の1894（明治27）年6月1日から8月15日までに発行された朝鮮・清国関係の地図を一覧化したものである。1894（明治27）年5月以前には、朝鮮や清

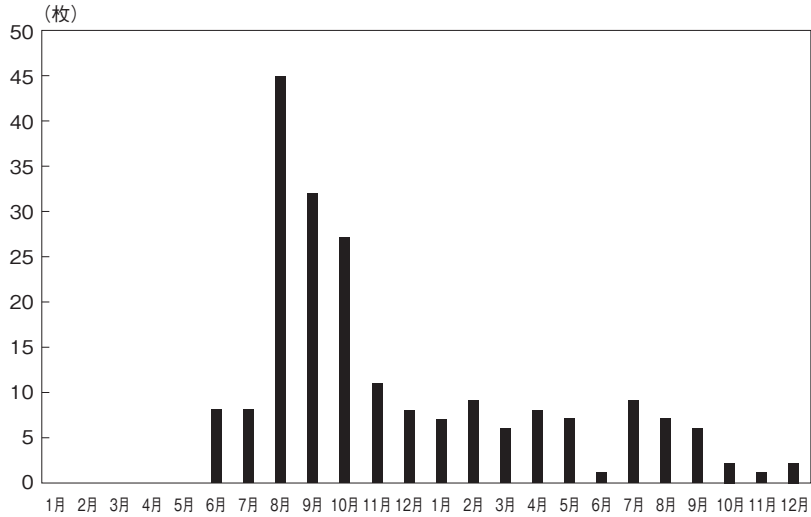


図 1 日清戦争前後（1894～1895）発行の朝鮮・清国関係地図の月別発行枚数の推移（官報付録「版權登録図書」より作成）

表 2 日清戦争開戦前後（1894年 6 月 1 日～8 月 15 日）発行の朝鮮・清国関係の地図

番号	登録番号	登録年月日	地図名	著作者	版權所有者	単価（厘）	出典
1	20684	1894.06.15	八道明細朝鮮地図	東京市箸尾寅之助	東京市箸尾寅之助	150	官報3307号付録
2	20687	1894.06.15	朝鮮内乱地図	東京市星野恵一	東京市田中太吉	100	官報3307号付録
3	20713	1894.06.18	朝鮮地理図	東京市鈴木留吉	東京市岩崎茂吉	80	官報3307号付録
4	20743	1894.06.22	新撰朝鮮国全図	東京市田中紹祥	東京市大橋新太郎	150	官報3313号付録
5	20768	1894.06.25	明治二十七年六月改訂朝鮮全図	東京市柴田源三郎	東京市柴田源三郎	250	官報3313号付録
6	20821	1894.06.29	日清韓三国対照朝鮮変乱詳細地図	東京市吉田東洋	東京市吉田東洋	150	官報3313号付録
7	20831	1894.06.29	朝鮮八道明細全図	大阪市大館金城	大阪市大館金城	80	官報3313号付録
8	20839	1894.06.30	朝鮮輿地図	大阪市清水常太郎	大阪市清水常太郎	350	官報3331号付録
9	20897	1894.07.05	新撰朝鮮国全図	東京市林正	東京市本原定次郎・加藤芳太郎	150	官報3331号付録
10	20910	1894.07.06	朝鮮国輿地全図	東京市岸田吟香	東京市岸田吟香	200	官報3331号付録

番号	登録番号	登録年月日	地図名	著作者	版權所有者	単価(厘)	出典
11	20925	1894.07.09	日清韓三国全図	東京市三好守雄	東京市三好守雄・出雲寺萬次郎	80	官報3331号付録
12	20927	1894.07.09	朝鮮全図	千葉県小宮寛制	東京市西村寅次郎	50	官報3331号付録
13	21004	1894.07.17	清国明細全図	大阪市大館金城	大阪市大館金城	80	官報3343号付録
14	21006	1894.07.18	朝鮮全図	東京市東京地学協会	東京市東京地学協会	250	官報3343号付録
15	21058	1894.07.24	実測朝鮮全図	大阪市宗孟寛	大阪市鈴木常松	100	官報3343号付録
16	21106	1894.07.31	朝鮮海陸全図	大阪府小橋助人	大阪府小橋助人	1000	官報3343号付録
17	21114	1894.08.01	朝鮮地図	大阪市中村芳松	大阪市中村芳松	150	官報3349号付録
18	21147	1894.08.06	清国本部輿地図	大阪市中田貞矩	大阪市中村芳松	300	官報3349号付録
19	21159	1894.08.07	支那新地圖附朝鮮全図	大阪市青木恒三郎	大阪市青木恒三郎	200	官報3361号付録
20	21174	1894.08.08	支那全国明細図	新潟市小山恒之助	新潟市櫻井産作	100	官報3361号付録
21	21177	1894.08.09	日本支那朝鮮三国図	東京市鈴木熊次郎	東京市鈴木熊次郎	80	官報3361号付録
22	21185	1894.08.09	中外方輿全図	東京市岸田吟香	東京市岸田吟香	4000	官報3361号付録
23	21186	1894.08.09	日清韓三国新図	東京市小林義夫	東京市田中太吉	100	官報3361号付録
24	21201	1894.08.11	朝鮮全図	仙台市今野謙三郎	仙台市今野謙三郎	70	官報3361号付録
25	21206	1894.08.13	朝鮮国全図	大阪市炭谷伝次郎	大阪市炭谷伝次郎	100	官報3361号付録
26	21211	1894.08.13	日本支那朝鮮三国明細図	東京市小林義夫	東京市西村寅次郎	80	官報3361号付録
27	21225	1894.08.14	朝鮮明細地図	大阪市宗孟寛	大阪市濱本伊三郎	100	官報3361号付録
28	21227	1894.08.14	朝鮮全図	京都市村田信兄	京都市須磨勘兵衛・中村浅吉	80	官報3361号付録
29	21236	1894.08.14	八道詳細朝鮮明細全図	大阪市中村芳松	大阪市中村芳松	80	官報3361号付録
30	21238	1894.08.14	改正実測支那全図	大阪市吉岡平助	大阪市吉岡平助	150	官報3361号付録
31	21245	1894.08.15	支那朝鮮全図	名古屋市若山文二郎	名古屋市若山文二郎	833	官報3361号付録
32	21246	1894.08.15	朝鮮地図	東京市関山造	東京市関山造	100	官報3361号付録
33	21260	1894.08.15	大日本及朝鮮清国全図	東京市永岡新助	東京市永岡新助	250	官報3361号付録
34	21265	1894.08.15	日本支那朝鮮三国精図	東京市鈴木熊次郎	東京市鈴木熊次郎	70	官報3361号付録

官報付録「版權登録図書」より作成

国の地図は1枚も発行されていなかったが、日清戦争直前の6月に天津条約に基づき、日清両国は朝鮮出兵を行ったことから、朝鮮への関心が高まり、6月15日から相次いで各出版社により朝鮮地図の発行が始まった。その後8月1日の日清両国の宣戦布告、そして戦争が激化する8月から10月まで、朝鮮をはじめ、清国、そして、日本・清国・朝鮮の3国を記した地図が相次いで発行された。特に宣戦布告された8月には、45点もの地図が発行されていることが注目される。地図は消耗品扱いされているため、こうした地図のほとんどは現存していない。1895（明治28）年4月の下関条約以降も地図が発行されているのは、清国からわが国に割譲された台湾の地図が相次いで発行されたためである。したがって、1894（明治27）年7月1日発行の「朝鮮輿地図」は、こうした朝鮮・清国の地図ブームのなかで、先駆けの地図の1枚であったと指摘できる。またこの時期に発行された朝鮮の地図のなかでも、30銭の「朝鮮輿地図」は比較的高価であったことも読み取ることができる。

【表3】は、日清戦争前後に出版された清水常太郎編輯、中村鐘美堂出版の朝鮮・清国関係の地図を一覧化したものである。日清戦争前後に中村鐘美堂が出版した朝鮮関係の地図は1番の「朝鮮輿地図」だけではなかった。中村鐘美堂がこの時期に朝鮮・清国関係の地図を15点も出版したのは、この関係の地図が大いに売れたからであると考えられる。

また、2番の「朝鮮地図」は、8月1日に版權登録された地図であるが、著作者として清水常太郎の名前はなく、著作者、版權所有者とも中村芳松となっており、価格は「朝鮮輿地図」の半額15銭となっていることが注目される。管見の限り、この地図は島根県立図書館（西田文庫）のみに所蔵があり、地図を入れた袋も現存していた。袋には「朝鮮地図 此図ハ朝鮮輿地図ヲ縮写セシモノニシテ、前年金玉均氏カ本国ヲ去時携帯シ来レル彼邦無二ノ明細分間大絵図ニシテ（略）時事ニ感ズル所アリ、乞テ之ヲ縮写シ（名ケテ朝鮮輿地図ト云フ）、図中八道・諸州・府県郡・兵營・水營・諸鎮・名勝・名邑・山川・岬角・港湾・島嶼ノ位置一見掌ヲ指スガ如シ（略）鐘美堂謹白」とある³³⁾。略した部分は「朝鮮輿地図」のケース内側の説明と同じである。すなわち、中村鐘美堂8月発行の「朝鮮地図」なる地図は、7月発行の「朝鮮輿地図」の縮写版であったのである。清水常太郎編輯、中村鐘美堂発行の一連の地図は、たいていの場合、中村鐘美堂が版權を持っていたものの、7月発

表3 日清戦争前後の清水常太郎(編輯)、中村鐘美堂(出版)の朝鮮・清国関係の地図

番号	登録番号	登録年月日	地図名	著作者	版權所有者	単価(厘)	出典
1	20839	1894.06.30	朝鮮輿地図	大阪市清水常太郎	大阪市清水常太郎	350	官報3331号 付録
2	21114	1894.08.01	朝鮮地図	大阪市中村芳松	大阪市中村芳松	150	官報3349号 付録
3	21147	1894.08.06	清国本部輿地図	大阪市中田貞矩	大阪市中村芳松	300	官報3349号 付録
4	21236	1894.08.14	八道詳細朝鮮明細全図	大阪市中村芳松	大阪市中村芳松	80	官報3361号 付録
5	21312	1894.08.20	清国明細全図	大阪市野際馨	大阪市中村芳松	80	官報3383号 付録
6	21346	1894.08.22	日清韓三国地図	京都市清水常太郎	大阪市中村芳松	150	官報3383号 付録
7	21383	1894.08.25	日清韓三国明細地図	京都市清水常太郎	大阪市中村芳松	80	官報3383号 付録
8	21423	1894.08.29	日清韓三国詳細地図	大阪市清水常太郎	三重県米津鎌治郎	80	官報3389号 付録
9	21565	1894.09.11	日清韓三国輿地図	京都市清水常太郎	大阪市中村芳松	300	官報3402号 付録
10	21982	1894.10.15	支那地図	京都市清水常太郎	大阪市中村芳松	120	官報3417号 付録
11	21984	1894.10.15	日清韓三国精図	京都市清水常太郎	大阪市岡田藤三郎	100	官報3417号 付録
12	22347	1894.11.13	亜細亜東部輿地図	大阪市清水常太郎	大阪市中村芳松	300	官報3431号 付録
13	23195	1895.02.05	台湾詳密地図 附録台湾島地誌撮要	大阪市松本仁吉	大阪市中村芳松	300	官報3495号 付録
14	23264	1895.02.13	占領明細新日本及渤海近傍詳細地図	大阪市清水常太郎	大阪市中村芳松	100	官報3508号 付録
15	23685	1895.03.28	台湾実測地図	大阪市清水常太郎	大阪市中村芳松	80	官報3530号 付録
16	24185	1895.05.14	日本輿地図 附新領地明細	大阪市清水常太郎	大阪市中村芳松	300	官報3589号 付録
17	25233	1895.09.18	改正台湾詳密地図	京都市後藤常太郎	大阪市中村芳松	200	官報3699号 付録

官報付録「版權登録図書」より作成

行の「朝鮮輿地図」の版權は清水常太郎が持っており、中村鐘美堂は発行者に過ぎなかったためと考えられるが、縮写版まで発行したのは、この時期朝鮮地図がいかにか売れたかを示すと考えられる。

さらに、大阪朝日新聞の7月4日・5日の「朝鮮輿地図」の広告には、「近刊●清国輿地図 壱部正価金卅銭、郵税四銭、図面表装朝鮮図ニ同ジ、本月拾五日発行ス」とある。【表3】では、3番の8月6日に版權登録された「清国本部輿地図」があり、30銭となっている。新聞広告に出ている「清国輿地図」はこれを指すとみられる。また、中村芳松の計報記事で出ていた、数十万枚売り尽くしたとされる清国地図はこれを指すとみられる。官報で著作者とし

て出てくる中田貞矩は、後述する中田印刷所の代表であり、中村鐘美堂が出版した地図を印刷する役割を担っていたものの、地図の編者としての功績はみられないので、どこかの地図を急きょ印刷にまわしたと考えられる。実際10月15日には、清水常太郎編輯、中村芳松発行、中田貞矩印刷で、新たに「支那地図」が版權登録され、発行されている。中村鐘美堂が売り尽くしたとされる朝鮮及び清国地図は、一連の朝鮮・清国関係の地図を指していると考えられる。また【表2】によれば、「清国本部輿地図」以前に発行された清国地図は、13番の東京の大館金城著及び版權所有者の「清国明細全図」しかない。8月以降は各社相次いで朝鮮や清国の地図を発行したことから、「朝鮮輿地図」同様、「清国本部輿地図」は清国地図の先駆けの1枚であったと指摘できる。

以上のように、販売枚数はともかくとして、日清戦争の影響で、中村鐘美堂は他社に先駆けて「朝鮮輿地図」や「清国本部輿地図」を発行したばかりでなく、朝鮮・清国・日清韓三国の地図を相次いで発行した。さらに中村鐘美堂以外の他社も相次いで朝鮮・清国・日清韓三国の地図を発行した。こうしたことから、中村鐘美堂発行の地図が当時好評を博し、大利益を得たという話は信憑性が高いと考えられる。

本稿で対象としている、府県ごとの地図である『大日本管轄分地図』の発行は、日清戦争開戦直前の1894(明治27)年3月に始まった。官報付録の「版權登録図書」によれば、まず3月には、8日「西海道之図」8枚、19日「南海道之図」5枚、28日「畿内之部」3枚、「山陰道之部」2枚、「山陽道之部」4枚が、6月5日には「北海道西部」3枚、「北海道部」3枚³⁴⁾、「東海道之部」9枚、「東山道」11枚が、8月3日には「茨城県管内全図」と「新潟県管内全図」が、翌年3月26日には「東京市図」、「京都市図」、「大阪市図」が版權登録されている。著者はいずれも清水常太郎、版權所有者は中村芳松(中村鐘美堂)となっている。この時期は、同じ清水常太郎と中村芳松で、朝鮮・清国・日清韓三国の地図を発行していることはすでに述べた。さらに、『大日本管轄分地図』は毎年訂正増補が出され、管見の限り、遅くとも1917(大正6)年まで、23年間にわたって毎年訂正版が発行された³⁵⁾。いずれも発行者は中村鐘美堂、印刷所は中田印刷所となっている。23年間にもわたって毎年訂正版が出ているということは、この『大日本管轄分地図』も、朝鮮・清国・日清

韓三国の地図と同様に、当時好評を博し、大いに売れたと考えられる。

注

- 22) 島屋政一『聖山中田先生伝』、聖山会、1953年、p.111。国立国会図書館デジタルコレクション（図書館送信限定資料）による。
- 23) 「大阪に於ける製紙出版印刷業の開拓者 鐘美堂主 故中村由松氏の伝」、『日本印刷界』69号、1915年、pp.45-46、国会図書館デジタルコレクション（図書館送信限定資料）による。句読点は筆者が適宜追加した。
- 24) 国立国会図書館デジタルコレクションによる。
- 25) 田中耕三「大正・昭和前期の地図教育に関する史的研究」、新地理 40-2、1992年、pp.1-19。
- 26) 国立国会図書館デジタルコレクションによる。
- 27) 島根県竹島資料室寄託資料（地図29）。校閲者の久保田貞則は表紙に「佐賀県尋常師範学校校長」（現在の佐賀大学文化教育学部）と記載されている。
- 28) 島根県竹島資料室寄託資料（書籍314）。
- 29) 「朝鮮輿地図」については、次の論文が詳しい。杉原隆「清水常太郎の「朝鮮輿地図」について」、島根県総務部総務課Web竹島問題研究所ホームページ、研究スタッフ、研究協力員からの報告、2008年<http://www.pref.shimane.lg.jp/admin/pref/takeshima/web-takeshima/takeshima04/takeshima04-1/takeshima04-h.html>（2016年12月17日閲覧）
- 30) 前掲10）。句読点は筆者が適宜追加した。
- 31) 国立国会図書館関西館所蔵マイクロフィルムによる。
- 32) 前掲31）。
- 33) 袋の裏には、「朝鮮輿地図」のケース内側の説明、広告と同様に、松本謙堂著の『支那地誌要略』と『朝鮮地誌要略』が紹介されている。中村鐘美堂は、当時朝鮮及び清国の地図と地誌を一体として発行、販売していたことがうかがえる。
- 34) 北海道は1枚しか発行されていないので、「北海道」の部分は「北陸道」3枚（富山・石川・福井）の誤記であると考えられる。いずれも1894（明治27）年6月の発行となっている。
- 35) 1917（大正6）年4月、『大日本管轄分地図』『山口県管内全図』、後藤七郎右衛門著、中村由松（大阪）・福岡元次郎（東京）発行、中田熊次印刷。著者蔵。福岡元次郎は、東京市日本橋区にあった中村鐘美堂の支店である。公的な図書館では、岩手県立図書館所蔵の1915（大正4）年6月発行の「岩手県管内全図」が一番新しい（著者も所蔵）。今後の調査により、さらに新しい地図が出てくる可能性がある。「岩手県管内全図」では、発行者として、中村由松の後を継いだとみられる中村寅吉の名前が出ている一方で、「山口県管内全図」では、1915（大正4）年5月5日に死去した中村由松の名前が出ている。しかしながら、「山口

県管内全図」では、1916（大正5）年9月に開業した美祢軽便鉄道（伊佐（現在の南大嶺駅）－重安間、現在のJR美祢線）が出ており、地図で一番重要な記載内容の更新が確認されることから、発行者名の更新を単に忘れたものと考えられる。

5. 印刷者中田印刷所について

【表4】は、『大日本管轄分地図』『島根県管内全図』のうち、公的な図書館等で所在が確認されたものを一覧化したものである。【表1】により、1895（明治28）年訂正再版の『大日本管轄分地図』では、いずれも、地図の編輯者が京都の清水常太郎、発行者は大阪の中村芳松（由松）（中村鐘美堂）、印刷所は大阪の中田貞矩（中田印刷所）となっていることを確認した。また、1915（大正4）年7月の中村芳松（由松）の計報記事においても、「其当時小学校児童用地図の発行を機とし当時の中田印刷所と提携して石版ミシンを購入した」、「是全く石版印刷の賜で中田印刷所も亦同慶に浴して大利益を博したのは云ふまでもない」とあるように、中村鐘美堂の地図の印刷は、中田印刷所と提携しており、大利益を博したことが確認された。すなわち、『大日本管轄分地図』は、清水常太郎、中村芳松（由松）、中田貞矩の三者が連携して発行、販売が可能となったといえる。【表4】では、4番の1898（明治31）年訂正再版から編輯者として後藤常太郎が、14番の1911（明治44）年版から、編輯者として後藤七郎右衛門が、7番の1901（明治34）年版には発行者として中村寅吉が、8番の1902（明治35）年再版と9番の1903（明治36）年再版には印刷者として中田精一が、10番の1906（明治39）年再版からは印刷者として中田熊次が出ている³⁶⁾。このうち、編輯者の後藤常太郎と後藤七郎右衛門は、次章で述べる。中田印刷所は、先に引用した1953（昭和28）年発行の『聖山中田先生伝』が詳しい³⁷⁾。

同書によると、中田貞矩（1837～1897）は、彦根藩士の末裔で、大阪に移住後、京都で銅版彫刻印刷術を習得して、1879（明治12）年大阪へ戻り、印刷所を開業して、銅版印刷を始めた。当初印刷の注文は微々たるものであったので、大阪府庁に勤務しながら、印刷所を経営していたが、1885（明治18）年には府庁を辞めて、銅版印刷業に専念することになった。1887（明治20）年頃からは、「心斎橋鐘美堂、嵩山堂その他の画肆より書籍表紙、挿絵及び地図類の注文を受け、超多忙、中田先生の技術は著しく進歩す」³⁸⁾と出ており、中

表4 『大日本管轄分地図』『島根県管内全図』の一覧

番号	西暦	発行年月	編纂者	発行者	印刷者	所蔵	備考
1	1894年	明治27年3月	京都市上京区室町通上立売上ル室町頭町46番戸 清水常太郎	大阪市南区末吉橋通4丁目89番 邸 中村芳松	大阪市南区安堂寺町4丁目207番邸 中田貞矩	国会図書館地図室	
2	1895年	明治28年3月訂正増補	京都市上京区室町通上立売上ル室町頭町46番戸 清水常太郎	大阪市南区末吉橋通4丁目89番 邸 中村芳松	大阪市南区安堂寺町4丁目207番邸 中田貞矩	『日本地図選集』所収	
3	1897年	明治30年7月再版	清水常太郎	中村芳松	-	明治大学蘆田文庫	未見※1
4	1898年	明治31年訂正再版	後藤常太郎	中村芳松	-	九州大学	未見※2
5	1899年	明治28年3月訂正増補	京都市上京区室町頭下木ノ下31番戸 後藤常太郎	大阪市南区末吉橋通4丁目89番 邸 中村芳松	大阪市南区安堂寺町4丁目207番邸 中田貞矩	島根大学ほか	
6	1900年	明治27年3月発行 明治32年5月第4版 明治33年6月訂正再版	後藤常太郎	大阪市南区末吉橋通4丁目89番 邸 中村芳松	大阪市南区安堂寺町4丁目207番邸 中田貞矩	一橋大学ほか	
7	1901年	明治27年3月発行 明治33年6月第5版 明治34年6月訂正6版	後藤常太郎	大阪市南区末吉橋通4丁目69番 邸 中村貞吉	大阪市南区安堂寺町4丁目207番邸 中田精一	個人	
8	1902年	明治35年9月再版	大阪府南区高津町五番町190番邸 後藤常太郎	大阪市南区塩町3丁目69番地 中村芳松	大阪市南区安堂寺町4丁目207番邸 中田精一	竹島資料室寄託409	
9	1903年	明治36年5月再版	大阪府南区高津町五番町190番邸 後藤常太郎	大阪市南区塩町3丁目69番地 中村芳松	大阪市南区安堂寺町4丁目207番邸 中田精一	東京大学史料編纂所	
10	1906年	明治39年8月再版	大阪府南区高津町五番町190番屋敷 後藤常太郎	大阪市南区塩町3丁目69番屋敷 中村由松 東京市日本橋区本銀町3丁目2番地 福岡元次郎	大阪市南区安堂寺町4丁目207番屋敷 中田熊次	一橋大学	
11	1907年	明治40年2月再版	大阪府南区高津町五番町190番屋敷 後藤常太郎	大阪市南区塩町3丁目69番屋敷 中村由松 東京市日本橋区本銀町3丁目2番地 福岡元次郎	大阪市南区安堂寺町4丁目207番屋敷 中田熊次	島根県立図書館	
12	1907年	明治40年7月再版	大阪府南区高津町五番町190番屋敷 後藤常太郎	大阪市南区塩町3丁目69番屋敷 中村由松 東京市日本橋区本銀町3丁目2番地 福岡元次郎	大阪市南区安堂寺町4丁目207番屋敷 中田熊次	個人	
13	1908年	明治41年3月再版	後藤常太郎	中村由松・福岡元次郎	-	明治大学蘆田文庫	未見※1
14	1911年	明治44年12月	後藤七郎右衛門	大阪市南区安堂寺橋通3丁目57番地 中村由松 東京市日本橋区本銀町3丁目2番地 福岡元次郎	大阪市南区安堂寺橋通4丁目207番屋敷 中田熊次	個人	

他大学等文庫視写、各図書館ホームページ等より作成

注1) 貴重資料であり、文献視写対象のため、複写できなかった。

注2) 資料が破損しており、複写ができないとのこと、複写できなかった。

田印刷所は、中村鐘美堂と当時大阪の代表的な出版社であった青木嵩山堂などから注文を受け、超多忙となり、後に中田家の分家となる中田熊次の技術は大きく進歩したとある。1888（明治21）年には、中田印刷所は石版印刷機を3台増設し、1890（明治23）年には、石版を主とし銅版を従とし、石版部を拡張して石版印刷機2台を増設したとあり、印刷業の中心を銅版から石版に変更したことが分かる。1892（明治25）年にも石版マシンを増設し、1894（明治27）年4月には工場を南区安堂寺橋通に移転し、工場が大きく拡張され、その際石版マシン2台を増設し、さらにドイツ製の石版マシンを輸入し、業界の人々は驚いたという。大阪でドイツ製の石版印刷機を導入したのは中田印刷所が初めてであったという。そうしたなか日清戦争前後に中田印刷所では、朝鮮・清国・満州・台湾・渤海湾付近地図を印刷して大多忙となったのである。さらに、銅版を石版に転写して印刷することに成功し、1895（明治28）年1月以降は銅版に印刷した地図・株券類・レットル等が石版に転写印刷され、精巧なものを生み出し、好評を得たという。

中田精一（1877～1905）は、貞矩の三男で、1897（明治30）年4月12日貞矩死去により、中田家を相続したが、1905（明治38）年4月13日、享年29歳で没した。

中田熊次（1871～1947）は、讃岐高松の七条八十八の次男として生まれ、1885（明治18）年大阪に来て、中田印刷所の徒弟となった。熊次は中田印刷所に入ってから、その精勤ぶりは、中田貞矩だけでなく、何人も感動せざるを得ず、銅版石版の技術において妙手と称賛されていた。また商略に富み、画策のよさにおいては同業者中に得難き才能を有していたので、中田印刷所では貞矩が柱石、熊次が支柱であったことは誰の目にも映っていたという。三男精一が貞矩の相続者と決まっていたが、1892（明治25）年の時点で、貞矩は56歳、精一はまだ若年16歳であったので、22歳の熊次を中田家の分家とし、中田印刷所の事業を掌握させることになった。同年熊次は貞矩の四女久尾と結婚し、中田家の分家を立てた。熊次は、その後中田印刷所だけでなく、印刷業界の発展に大きく貢献し、大阪府会議員、大阪府参事会員としても活躍した。熊次の次男秀夫は、1910（明治43）年本家の養子となり、1914（大正3）年中田家を相続した。すなわち、【表4】に出てくる中田貞矩、精一、熊次の名前は、中田印刷所の歴史と符合するのである。

さて、中田印刷所と地図との関係であるが、同書の「中田印刷所の大発展」には次のように出ている³⁹⁾。当時の地図印刷の具体像を示す貴重な記載であるので、長文であるが、引用することとする。文中の「中田先生」は中田熊次を指している。

さて中田印刷所は、明治二十七・八年の日清戦役に際して、全く破天荒の発展を遂げた。中田印刷所は有ゆる印刷所に於て、その優秀なること、まさに一頭地を抜いていたが、分けても地図の印刷には他の到底企及難き一種独特の妙技を発揮して居た。「中田の地図」と称されて、地図は中田製に限るとさへ賞讃を博して居た。文部省でさへ地理書や書籍挿絵の注文を中田印刷所へ発していた位いであるから、如何にその印刷が鮮明であり精巧であつたかが察しられる。

日清戦争勃発に当り、中田先生は地図の需要増加を思い、支那、朝鮮、台湾、満洲、渤海湾附近の地図を大量に印刷した。何れも忽ち品切れという盛況であつた。次ぎには朝鮮の朴泳孝の肖像を入れた地図を発行した。日清役の戦場は初め朝鮮であつた為め、これは非常な売行であつた。各書店や地図屋からその店員が毎日中田印刷所に詰めかけて、印刷仕立ての地図の奪い合いの有様であつた。

この時の支配人木村寿美氏は当時の景況をこう語っている。「全くあの時は店の繁昌というよりも実にもの凄いものでありました。いくら刷つても地図が足りないものですから、朝は暗い内から地図の小売店の者が店先に立ち、それが二丁も三丁目も毎日人垣を作るという有様でした。朝戸を開けると吾先きに雪崩れ込むのですから、手の着けようがない始末です。地図は小売店へ卸ろしていたのですから月末勘定でしたが、あまりに混雑するので、現金引換えということにしたのです。ところが現金さへ持つて行けば誰れにでも卸ろしてくれるというので素人までが買いに来て、地図を仕売するという有様で混雑は益々甚しく、金を受取る品物を渡すで人手は何人あつても足らず、全くてんてこ舞の状態でした。あの時急に石版マシンを三台増設して急場を凌ぐことゝしたのですが、それでも印刷が間に合わず、実に閉口しました。その代り金は天から降るように溜まりましたが、一番困つたのは近所からの苦情でした。毎日店

先に入垣をつくられて商売が出来ないというのです。夕方になると私と大沢君とが反物に金一封附けたり、菓子一折つけたりしてお詫びに行つたんです。そのお詫びも一度なら兎も角毎日のことですから実に弱りました。しかし店の活気と云つたら素晴らしいもので皆が活発に元気よく働いたものです。当時は石版マシン一台購入するだけでも容易ならぬことでしたが、中田印刷所では芋でも買うように何気なく手軽に買へましたから、思う存分工場の拡張も出来たものです。」と、木村氏の懐旧談は中田印刷所の発展ぶりを眼のあたり見る如く、全く胸のすく話であつた。

日清戦役中は地図のみでなく、いろいろの注文も多く、中田印刷所はますます盛大を致し、業界の声望愈々高きものがあつた。

中田印刷所の印刷した地図は、鮮明かつ精巧であつたので、「中田の地図」と称され、賞賛されていたことがまず注目される。次に、日清戦争勃発にあたり、1894（明治27）年から、地図の需要増加を考え、清国・朝鮮・台湾・満州・渤海湾付近の地図を大量に印刷したのは、1892（明治25）年に中田貞矩の四女と結婚し、中田家の分家を立てた中田熊次であつた。熊次はこの時25歳であつたが、【表4】で取り上げた、中村鐘美堂発行の日清戦争関係地図の印刷の取り仕切りをしていたのが、中田熊次であつたことは興味深い。中田貞矩はこの時59歳で、亡くなる2年前のことであつた。同書のうち「中田先生と久尾女と結婚」には、中田家に入った頃の熊次は、すでに印刷事業において老熟の域に達しており、技術方面のみならず、営業上においても才能をふるっていたとされ、中田印刷所の営業部担任の形式にあつたという⁴⁰⁾。こうしたことから考えるに、日清戦争直前の1894（明治27）年3月から発行の始まる『大日本管轄分地図』も、中田印刷所では中田熊次が担当していた可能性がある。

また、これらの地図が「何れも忽ち品切れという盛況であつた」という記載により、前章で述べたように、【表3】に出てくる「朝鮮輿地図」、「清国本部輿地図」を含めた朝鮮・清国・日清韓三国の地図のいずれもが好評であつたことを改めて確認できたことになる。さらに「次ぎには朝鮮の朴泳孝の肖像を入れた地図を発行した。日清役の戦場は初め朝鮮であつた為め、これは非常な売行であつた」というのは、「朝鮮輿地図」のことを指しており、

朴泳孝の肖像というのは、正しくは朴泳孝の題字と跋文を指している。ただ、同書及び中村由松の訃報記事では、「朝鮮輿地図」が人気を博し、売り切れたという記載は共通しているので、その部分について間違いはないと考えられる。

また、同書のうち、安堂寺橋通への工場移転前にあたる「京町堀時代の中田印刷所」では、中村鐘美堂と中田印刷所との強固な関係を示すものとして次のような記載がある⁴¹⁾。

明治二十二年の春から始めた中田印刷所製、額面用光沢石版画は満都の人気を博した。これは額面用大小数種の石版画に艶ニスを引いて光沢をつけたものであった。当時舶来として市販されるものがなかなかの売行であったが、貞矩翁はその値の余りに高価なるに驚き、自ら立派な額面用石版画を作り、これに艶ニスを引いて、書店及び額縁商並に絵画店等へ卸したのである。これが意外にも大当りを占めて中田印刷所は大多忙を極めるに至った。その印刷頗る鮮明且つ美麗なるにより中田印刷所の名声は頓に揚がり、書店よりの書籍表紙及び口絵の類を依頼するもの甚だ多く、中にも書肆中村鐘美堂よりの注文は毎月非常の大量に上った。(略) 中村鐘美堂がその出版物を中田印刷所に託したことは同店の大なる強味であると同時に、中田印刷所も鐘美堂と提携することにより一層の生気を加えた。茲に於て両者相呼応してそれぞれ業界に勇飛すること、なつた。中田貞矩翁は将来印刷業を以て大成せんと志し、中村由松氏は出版業者として他を圧倒せんと希望に燃えて居たれば、両氏の意気は漸次投合し、相共に誓つて各々その目的を達成せんと、両者の関係は愈々密となつた。翁は一挙に石版印刷機を三台増設し、多くの優秀なる技術家を招聘して、工場施設の充実と生産能率の向上を図つて中田印刷所はますます盛大に赴いた。

さらに、1897(明治30)年5月22日、彦根にある菩提寺長松院で中田貞矩の忌明法会(四十九日法会)が行われ、法会の後「中村家昔話の会」が開催されたが、同書では、その会で披露された話が掲載されている。長文であるがその一部を引用する⁴²⁾。引用する部分は、中田晴子(貞矩翁未亡人)、中

村芳松（由松）（大阪鐘美堂主人）、大平力夫（貞矩翁次男）が語っている部分で、中田貞矩が1886（明治19）年に石版業を導入したものの、当初はうまくいかなかったが、後に中村鐘美堂からの発注により、石版業が軌道に乗り、大成功する様子が出ている。中村鐘美堂と中田印刷所との強固な関係がいかにか構築されたのか、中村芳松に対する中田貞矩の心情などを具体的に読み取ることができる。

晴子「私もあの時は驚いたのです。折角苦心して石版を始めたのに早ややめなければならぬのかと思つて情けない気持ちになつたのですが、子供をなくした後に次ぎ次ぎと病人が出来たり、印刷物の注文もそう沢山なかつたりで、主人もすつかり気を腐らしてしまひまして、人を使つて印刷屋などよりも月給取になつて気楽に暮らしたいと思つたのでしよう。急に仕事の方がいやになつたらしいのです。何事も熱心にやられたのですが、あの時は人間が變つていたように見えました。多分病人つづきでしたから、仕事の方や看護のことに疲労して神経衰弱にかかつて居たのでしょう。その内にここにおいでになる中村さんから注文を沢山頂きましたので、仕事に追われましたので、何考える間もなく、知らず知らずの内に身体も壮健になり、仕事の方も順調に行きましたのは、中村さんのお蔭だと喜んでゐる次第です。」

中村「私のお蔭だなどと申されると実に恐縮に堪えません。私方こそ非常のお蔭を蒙つたのです。私は鐘美堂を創立しまして、何んでも大阪一の出版屋になりたいという野心がありましたので、いろいろの出版を試みたのです。その頃大阪では活版印刷の方は余程進んでいましたが、銅版の方はやや落ち目で、石版の方が流行しかけた時代でありまして、本の表紙や口絵などは石版印刷でなければ売れないという時でした。しかし石版業者として当時まだこれという大きな印刷屋がありませんから、自分で石版印刷所を設けるより仕方ないことになりました。その時中田印刷所はなかなか美しい石版印刷をするというので、私としましては技術方面に自信がありませんものですから、一日貞矩翁を訪問して石版印刷の事に就いて相談しましたところが、翁も非常に乗り気になつてくれまして、どんなものでも全部引請けてやろうとのことでしたから、私も

これで大いに力づき、出版一途に進むことが出来たのは誠に有り難いことであつたと今に感謝して居ます。」

大平「あの時が面白いのですよ。石版を止めたいから相談に来いと云われまして、私が行つて石版業を継続することになつたのですが、四・五ヶ月経つてからたしか明治十九年の末だと思ひますが、来春から石版専門でやると云う手紙をよこしたのです。この時も私は驚いたのです。止めると云つてからまだ間がないのに石版専門でやると云うものですから、父は又どうかしているのかと思つて心配でたまりませんから、大阪へ行つて母に聞きますと、中村さん方のお仕事で大変忙がしいのだとのことで安堵したわけでした。」

中村「翁はいつも早く、しかも美しく印刷してくれますのには感謝したものです。或る時日本地図の印刷を頼みました時、これは銅版にした方が石版よりも精巧で美しく仕上がるとのことでありましたから、では銅版でとお願いしたのでした。その頃はその彫刻に二十日から一ヶ月かかつたものです。お願いしてから十四・五日目でした。他に用がありまして訪問しますと、驚いたことにはこんなのが出来たと申して、その地図の印刷を見せられたのです。もう一兩日の内に全部印刷を了りますとのことに、びつくりしたのです。何んとまあ早いことだと感心したのですが、その印刷が鮮明なばかりでなく、いろいろと工夫をこらして、実によく出来ていますので、それからというものは、何んだ彼だと御無理願つて、鐘美堂も頗る順調によい成績を挙げるようになりました。翁は万事入念にそして迅速に物を仕上げるという調子でしたから、中田印刷所の大成巧を見られたわけだと思います。」

大平「一旦思い立つたことは早くそれを形付けたいというのが父の性質でした。」

中村「そうですね。前申した地図の銅版彫刻をお願いした時なんか毎晩夜おそくまで殆んど徹夜同様にやつていただいたそうです。でなければあんなに早く出来る筈がありません。」

中村芳松（由松）の発言のなかに出てくる日本地図とは、文脈から日清戦争前後の地図であるとみられ、官報付録「版權登録図書」より作成した【表3】

によれば、16番、1895（明治28）年5月14日版權登録の「日本輿地図 附新領地明細」であると考えられる。著者は清水常太郎、発行者・版權所有者は中村芳松、印刷者は中田貞矩で⁴³⁾、いつものメンバーとなっている。地図には日本列島のほか、「新領地盛京省」と「新領地台湾島」が出ている。1895（明治28）年に中村鐘美堂は朝鮮・清国・台湾などの地図の発行ほか、『大日本管轄分地図』の訂正再版の発行も行っていたことから、中田印刷所は臨戦態勢で印刷をしていたことが地図の一覧からも確認することができる。

このように、中村鐘美堂と中田印刷所との強固な関係は、石版による美しい印刷が発端となり、それが後には日清戦争関係の地図の印刷につながり、ひいては『大日本管轄分地図』の企画・印刷・発行につながっていったことを確認することができる⁴⁴⁾。

注

36) 細かいことであるが、管見の限り、同じ中村鐘美堂発行地図で、最初に中田精一が出てくるのは、1898（明治31）年10月発行の「大演習枢要地図」（国立国会図書館東京本館地図室所蔵）である。中田熊次が初めて出てくるのは、1905（明治38）年5月発行の「訂正再刻台湾詳密地図」（国立国会図書館東京本館地図室所蔵）である。

37) 前掲22)。

38) 前掲22)、p.365。「中田熊次先生年譜記事」。

39) 前掲22)、pp.117-118。句読点を適宜筆者が加えた。

40) 前掲22)、p.113。

41) 前掲22)、p.111及びp.112。

42) 前掲22)、pp.129-131。句読点を適宜筆者が加えた。

43) 国立国会図書館東京本館地図室所蔵。

44) 明治27（1894）年3月26日官報3218号付録所収「版權登録図書」によると、3月8日登録で、19612号「大日本管轄分地図 西海道之部」（8枚）があり、著作者として「大阪市 中田貞矩、京都市 清水常太郎」、版權所有者として「大阪市 中村芳松」が記載されている。これは「大日本管轄分地図」で初めて版權登録されたものである。そのなかで、著作者として、京都市 清水常太郎とともに、印刷者 中田貞矩が出ていることが興味深い。これ以降中田貞矩は「大日本管轄分地図」の著作者として出ていない。「大日本管轄分地図」の企画にあたり、印刷者 中田印刷所が関与した可能性がある。

（以下次号）

「松江が生んだ美術史家・相見香雨～九州大学文学部所蔵『自筆調査録』展」実施報告

桑原羊次郎・相見香雨研究会

代表 村 角 紀 子

註：本稿は、先に関係者に配布した当該展覧会報告書（私家版、A4版16頁、100部印刷、2016年10月刊）の原稿を改稿したものである。

1. 実施報告

本展は、桑原羊次郎・相見香雨研究会が公益財団法人いづも財団の助成を得て行った事業「『相見香雨自筆調査録』の研究と紹介」の成果である。本事業では、鳥根県松江市出身の美術史家・相見香雨（繁一、1874～1970）が60年近くにわたって書き継いだ「相見香雨自筆調査録」（国立大学法人九州大学文学部所蔵、全42巻240冊）を松江に移送して調査と撮影を行い、その過程で明らかとなった成果を地元で初めて展示・紹介した。本展の実施報告は以下の通りである。

なお、原資料借用にあたっては九州大学附属図書館より、借用中の資料保全と調査撮影にあたっては鳥根県立美術館より多大なご協力を得た。筑波大学附属図書館、鳥根県立美術館には展示用図書の借用や解説パネル等の準備にあたってご助力を得た。また、原資料の情報提供と調査方針の検討にあたっては中野三敏先生、玉蟲敏子先生よりご助言を賜り、相見香雨著作権者である関聡子氏には本事業の準備段階から全面的にご協力をいただいた。諸氏に深く感謝の意を申し上げる。

1.1 概要

- ・ 名 称：松江が生んだ美術史家・相見香雨
～九州大学文学部所蔵「自筆調査録」展
- ・ 会 期：2016（平成28）年7月11日（月）～31日（日）
※会期中無休、20日間

- ・ 場 所：島根大学附属図書館 1F展示室
(〒690-8504 島根県松江市西川津町1060)
- ・ 開催時間：平日 8：30～21：30、土日祝10：00～17：30
※ 7/23・24・30・31は9：00～21：00
- ・ 入 場 料：無 料
- ・ 主 催：桑原羊次郎・相見香雨研究会、島根大学附属図書館
- ・ 協 力：九州大学附属図書館

1.2 実施経緯

2015年	11月27日	九州大学文系合同図書室より「自筆調査録」を借用搬出 ※輸送は往復とも(株)日本通運「貴重品輸送」を利用
	11月30日	島根大学附属図書館に搬入
	12月4日	同館保存処理室で燻蒸（脱酸素、～17日終了）
2016年	1月4日	同館作業ラボにて第1帙より順次デジタルカメラで撮影開始
	4月7日	撮影終了（以後、データ確認のうえ8月7日まで追加撮影実施）
	5月20日	同館作業ラボにて内容調査、採寸
	7月6日	筑波大学附属図書館より展示用図書『罹災美術品目録』郵送受取
	7月8日	同館1F展示室にて展示作業
	7月11日	展示会開始（～31日まで）
	7月20日	展示解説①（担当：村角紀子、林みちこ）
	7月30日	展示解説②（担当：村角紀子、藤間 寛）
	8月1日	撤収
	8月2日	筑波大学附属図書館へ『罹災美術品目録』郵送返却
	8月17日	「自筆調査録」梱包搬出
	8月19日	九州大学文系合同図書室へ「自筆調査録」返却終了
	8月26日	画像データの整理終了
	9月15日	画像データ・目録を九州大学・島根大学・遺族へ提出完了

1.3 展示構成

展示は大きく3部構成とし、内容は以下の通りとした（詳細は後掲の展示解説、出品リストも参照）。

導入

- (1) ごあいさつ～相見香雨とは (担当：村角紀子)
- (2) 「自筆調査録」とは (村角)

1. 自筆調査録より

- (1) 相見香雨のライフワーク「琳派」 (大森拓土)
- (2) 郷土ゆかりの美術鑑賞記～松平家、八重垣神社～ (藤間 寛)
- (3) 美術サークル「審美会」の活動 (藤間)
- (4) 1910年日英博覧会と相見香雨
～審美書院の出店と『特別保護建造物及国宝帖』 (林みちこ)
- (5) 関東大震災と『罹災美術品目録』 (村角)

2. 「相見香雨自筆調査録」の全容

3. 相見香雨の著作

資料パネル

- (1) 相見香雨年譜・著作一覧 (村角)
- (2) 松江から見た相見香雨
～「相見香雨翁を語る」(『島根新聞』掲載座談会記事)

参考図書

大型ディスプレイ～「自筆調査録」デジタル画像

(上記1. で展示した巻号について全画像を公開)

1.4 印刷物

- ・ポスター A 2 版 2 枚 (島根大学学内掲示)
- ・チラシ A 4 版両面フルカラー 500枚配布
- ・出品リスト A 4 版 300枚会場配置

1.5 広報、取材等

- ・島根大学、同附属図書館 HP掲載
- ・『山陰中央新報』 イベント告知欄、7月10日、11日、26日掲載
- ・山陰ケーブルビジョン 7月11日17:00～ (ニュース内放映、以後同内容を複数回)

1.6 来場者

- ・総入場者数：300人 (推計)
- ・展示解説聴講者数

① 7月20日（水）午後2時～ 8名

② 7月30日（土）午後2時～ 5名

・アンケート回答者数

・シール式 46名（法文学部6名、教育学部4名、生物資源科学部4名、学外32名）

・記述式 7名（年代：10代 3名、20代・50代・60代・80代 各1名）

コメント：

- ・きっと本人は何気なくしたためにおられたものが歴史となって残っていてすごいなと思いました。私も何か書こうと思います。（10代、出雲市）
- ・貴重な当時の資料を見ることができてよかった。（10代、島根大学学生）
- ・今まで相見香雨さんのことは全く知りませんでしたが、この展示会で知るきっかけとなり良かったです。今回は初の展示ということで、もっと色々な所でも展示してほしいと思います。（20代、同上）
- ・研究成果の展示として重要です。是非、さらなる研究の成果を企画されてください。（50代、福岡県）
- ・相見香雨について見識がなかったので興味深かったです。娘の関高子氏についての随想集も興味深く、読んでみたいと思いました。（60代、松江市）
- ・2018年不昧没後200年展に関連非常に高く全くタイムリーと云いましょうか。もっともっと一般の方への周知方を宜敷願います。（80代、松江市）

1.7 成果報告

1.7.1 来場者について

入場総数は約300人と推計した。入場無料で出入自由としたため正確な数は不明だが、シール式アンケートの回答状況や、主催者が会期中会場内を確認した際の様子から、最終的に1日平均15名程度×会期20日間とした。学外広報はやや不足気味だったと思われるが、地元紙のイベント告知欄の掲載や地元ケーブルテレビのニュース放映が複数回あり、地域の方に多く足を運ん

でいただくことができた。

シール式アンケートの結果に拠れば、来場者は学内よりも学外から訪れる方が際立って多く見られた。記述式アンケートの回答を見ると、図書館利用や受講目的で偶然立ち寄った方は相見香雨の存在を初めて知ったというコメントが多く、テレビやチラシを見て来場した場合はもともと相見について知識を持っていた傾向が見られた。また、展示解説には両日とも40～80代前後で郷土史に強い関心を持った方が多く参加され、熱心な質問が相次いだ。

相見や「審美会」（相見の松江疎開中開かれた美術鑑賞サークル）にゆかりの深い方が多く来場したのも特徴である。来場した関係者から、主催者が会場で直接、資料の記載内容について新知見をうかがう機会にも恵まれた。資料パネルの座談会記事や年譜を熟読し、旧知の名に楽しげにコメントを加えるなど、相見の出身地ならではの姿がしばしば見られた。

また、県外研究者の関心も高く、本資料と同様に美術史家・土居次義の調査ノートを一括保存している京都工芸繊維大学から多田羅多起子氏が観覧され、最終日には「自筆調査録」の保管責任者である九州大学・井手誠之輔先生が観覧された。

1.7.2 展示成果と課題について

本展の成果としては、第一に、相見香雨という美術史家の存在を出身地・松江にあらためて紹介できたことが挙げられる。相見は30代で上京して業績を積み、最後も東京で没しており、現在の地元での知名度は全国区のそれに比してむしろ低いと言わざるを得ない。このため本展の構成にあたっては、「自筆調査録」の単なる調査報告にとどまらず、相見の基本的な人物像、代表的な研究業績に加え、地元ゆかりのエピソードを紹介するよう配慮した。上掲の記述式アンケートのコメントからは、相見を初めて知った方に関心を持てただけの様子がかがえ、この方針は成功したと言える。また、展示解説の聴講者の感想を聞くと、もともと相見について知識を持っていた地域の方にも満足いただける内容となったと思われる。会期終了後、『山陰中央新報』に市民の投稿「誇らしく思う相見氏の業績」が掲載された。

第二に、「自筆調査録」のデジタル画像化による研究の大幅な進展である。全42帙の撮影を概ね計画通り完了し、その画像を研究会メンバーで分担して

詳しく検証できた意義は大きい。個々の研究成果は本展第1部で5つのテーマ別に紹介したが、例として、最終年記の確認を挙げておきたい。本資料の記録開始が第1帙第1冊冒頭の1909（明治42）年8月2日からであることは明らかだったが、各冊の記述形式が不統一で年代が入り組んでいるため、最後については判然としていなかった。今回、全画像を通覧しデータを目録化することで、最も新しい年記が第37帙第5冊の日記にある1967（昭和42）年7月16日であることが明らかとなった。本展ではこの成果を導入解説に取り入れると同時に、第2部で最初と最後のノートとを並べて展示し、本資料に費やされた歳月を視覚的に示すことができた。また、第1部に展示したノート全体のデジタル画像を大型ディスプレイで公開し、展示頁以外も閲覧できるようにした。これは来場者に好評であり、画面操作上の改善点が確認できるなど、将来的に全画像をデータベース上で公開するテストとしても有効であった。

第三に、今後の研究の方向性を明確にできたことを挙げたい。本事業開始当初、本研究会メンバーの多くは相見の研究対象と人的ネットワークの多様性に戸惑い、かつ、彼の評価基準にはジャンル・時代・様式といった従来の美術史の枠組みや制度論では捉えきれない要素が絡んでいるという感触を持っていた。今回、「自筆調査録」を実際に閲覧し、また展示中に県内外の来場者から見解をうかがう機会を持ったことで、その多様性を読み解くコードは、やはり近世からの連続性を持った地域独自の特性にあるのではないかという示唆を得た。この〈ローカル・コンテクスト〉というべき視点を明確にできたことは、相見に加え桑原羊次郎を対象とする本研究会にとって大きな収穫であった。

今後の課題としては、「自筆調査録」テキストの精読があげられる。本展準備にあたっては時間の制約から、相見の年譜と著作一覧をもとにあらかじめテーマを設定し、該当する年代のノートに目的の記述を探す、という手順で調査を進めた（例えば、『罹災美術品目録』関連の記述を探して関東大震災後のノートをたどる等）。このため、虚心に調査録自体を読みこみ、既存の文献にない新事実を発見する、ということには及んでいない。これは時間をかけて取り組んでいきたい。

最後に、本研究会では今後も調査研究を進め、桑原羊次郎生誕150年にあ

たる2018年に小企画展、相見香雨没後50年にあたる2020年に企画展とシンポジウムの開催を計画している。本展はその試行段階として、各機関の協力を得て企画・広報・展示を進める非常に良い機会ともなった。関係諸氏に感謝の意を申し上げたい。

【桑原羊次郎・相見香雨研究会 メンバー一覧】

代 表 村角 紀子（松江市史料編纂課専門調査員）

副代表 藤間 寛（島根県立美術館学芸専門官、松江歴史館学芸専門監）

林 みちこ（島根大学嘱託講師、日本学術振興会特別研究員）

小林奈緒子（島根大学附属図書館事務職員）

大森 拓土（島根県立美術館主任学芸員）

西島 太郎（松江歴史館専門学芸員）



2015年11月27日 九州大学文系合同図書室より借用搬出



12月4～17日 島根大学附属図書館にて燻蒸



2016年1月4日～ 同館作業ラボにて撮影開始



5月20日 作業ラボにて内容調査と採寸



7月11～31日 島根大学附属図書館
展示室にて展示会開催



会場入口付近



導入パネル



1. 自筆調査録より



(1) 相見香雨のライフワーク「琳派」



(2) 郷土ゆかりの美術鑑賞記、(3) 審
美会の活動



(4) 日英博覧会、(5)『罹災美術品目録』



2. 自筆調査録の全容



3. 相見香雨の著作



大型ディスプレイでのデジタル画像公開



7月20日



展示解説

2. 展示解説・資料（抜粋）

2.1 導入

2.1.1 ごあいさつ

本展は、松江市出身の美術史家・相見香雨（繁一、1874～1970）が60年近くにわたって書き継いだ「相見香雨自筆調査録」（九州大学文学部所蔵）を地元で初めて展示、紹介するものです。

相見は1874（明治7）年松江市魚町に生まれ、島根県尋常中学校でラフカディオ・ハーンに英語を学んだ後、東京専門学校（現・早稲田大学）に進学します。1901（明治34）年に帰松して『松陽新報』（現『山陰中央新報』）創刊と同時に編集者となり、その後、1907（明治40）年頃に再上京して著名な美術専門出版社・審美書院で美術書編纂に従事。1910（明治43）年にロンドンで開催された日英博覧会では同社出店のために渡欧し、欧州各地を歴訪して美術視察を行いました。帰国後、琳派研究を中心に「抱一上人年譜稿」（1927年刊）ほか多数の論考・著作を発表。在野の立場で優れた研究を続け、1952（昭和27）年に78歳で文化財保護委員に就任しました。その後も96歳で歿するまで日本美術史研究の進展に重要な足跡を多数残していますが、今日では地元でもその名を知る人が少なくなっています。

今回は「相見香雨自筆調査録」から、琳派研究など代表的な日本美術調査記録、雲州松平家や八重垣神社など地元ゆかりの名品鑑賞記、そして松江に疎開し地元有志と美術サークル「審美会」を主催していた1940～50年代の日記などを、関連資料とあわせて展示します。そのほか『雲州餘彩』（1922年刊）をはじめ相見の貴重な著作を多数紹介しています。なお、本展は島根在住の研究者有志6名によって構成する「桑原羊次郎・相見香雨研究会」が2014（平成26）年より行ってきた研究成果によるものであり、資料借用にあたっては九州大学附属図書館、調査撮影については島根大学附属図書館より多大なご協力を得ました。また、本事業は公益財団法人いづも財団の助成をいただき



相見香雨 肖像

ました。最後に、開催にあたってご助力を賜りました島根県立美術館、筑波大学中央図書館をはじめ関係各位に心よりお礼申し上げます。

2016年 7 月

桑原羊次郎・相見香雨研究会

2.1.2 「相見香雨自筆調査録」とは

「相見香雨自筆調査録」は、相見が審美書院で調査助手を始めた30代から、紫綬褒章を受章し美術史界の大家となった90代まで、戦禍を挟んでなお絶えることなく書き継がれた全42帙240冊（ノート230冊、手帖10冊）にのぼる日本美術の調査記録です。

相見は1907（明治40）年暮、松江の『松陽新報』編集者を辞して上京。翌年、審美書院に入社し、美術史研究者としての第一歩を踏み出しました。「自筆調査録」第1帙第1冊は、入社翌年の1909（明治42）年8月2日、奥絵師の狩野四家のひとつであった中橋狩野家訪問の記録から始まっています。これは当時、同社で大村西崖が編纂を進め、相見が助手を務めていた『東洋美術大観』日本絵画篇の関連調査と考えられます。相見はこの時35歳。以後、「自筆調査録」には名家や寺社での作品鑑賞記、入札会の覚書き、画家の墓碑や過去帳の調査記録、文献の抄録などが連綿と綴られていくことになります。

そして「自筆調査録」で年記を確認できる最後の記録は、第37帙第5冊に残された1967（昭和42）年7月16日の日記です。92歳となり、公的に論文を



「相見香雨自筆調査録」全42帙240冊
国立大学法人九州大学文学部所蔵

発表したのもこの年1月が最後でした。本資料は、まさに相見の研究活動の出発から終焉までが手にとるように分かる史料と言えるでしょう。

1970(昭和45)年に相見が96歳で亡くなった後、本資料は、東京都北区滝野川の自宅「飛鳥山房」の夫人の元に残されました。その後1984(昭和59)年、相見の絵本研究に私淑した近世文学研究者・中野三敏氏の仲介により、同氏が文学部教授を務めていた九州大学(福岡市箱崎区)へ旧蔵書の一部とともに寄贈。現在、「相見文庫」として同大文系合同図書室に収蔵されています。貴重な和漢籍が数多く含まれる旧蔵書は研究用として広く閲覧に供されてきましたが、本資料については外部に情報が公開されることはなく、この度の展示会が初公開となります。

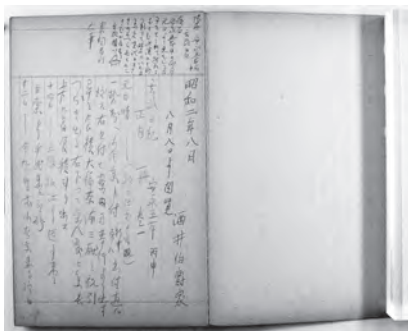
2.2 自筆調査録より

2.2.1 相見香雨のライフワーク「琳派」

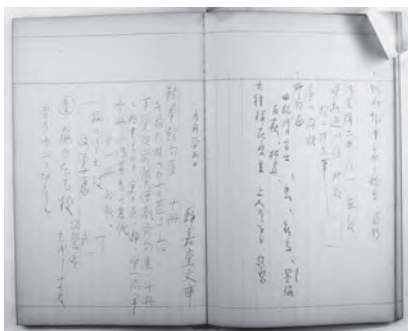
相見香雨は美術叢書の編集や監修、著作や論文の執筆を数多く手がけ、その研究領域は、宋・元代の中国絵画、室町・桃山期の水墨画、江戸期の文人画、琳派、復古大和絵(この呼称は相見による)、浮世絵、版本・絵本類など多岐にわたっている。その中でも「琳派」の研究は相見のライフワークであった。

“光琳派”の絵画を収録した『東洋美術大観』第五冊(審美書院、1909年)の編集にはじまり、相見は晩年まで精力的に研究成果を発表し続けた。その対象は本阿弥光悦、俵屋宗達、尾形光琳、尾形乾山、酒井抱一を中心に、喜多川相説、渡辺始興、深江蘆舟など、現在「琳派」で括られる画家の多くを網羅しており、その後の琳派研究における基礎文献となった論考も少なくない。

例えば、「抱一上人年譜稿」(『日本美術協会報告』6、1927年)は『玄武日記』、『摘古探要』、『輕拳館句藻』などの一次資料に依拠して編まれた詳細な年譜で、抱一研究の基礎文献となった。また「宗達の仙仏画と『仙仏奇踪』」(『大和文華』8、1952年)は、宗達派による水墨人物図のイメージソースが明代末の書『仙仏奇踪』内の図様であることを解明した重要な論考である。他にも、それまで伝記不明であった深江蘆舟の墓と過去帳の発見を機に、蘆舟の琳派内での位置づけを考証した「深江蘆舟の墳墓発見をめぐる」(『大和文



「相見香雨自筆調査録」11-2
1927年8月8日



同 11-4 1927年9月25日

華』31、1959年）も相見の業績として知られている。

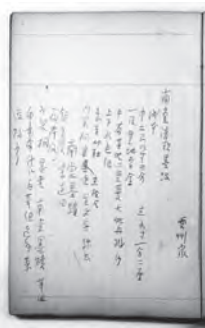
このような琳派研究の中で、相見が数多くの新出作品や資料を積極的に紹介したことも注目される。旧大名家や財閥の名士、地方の素封家らが秘蔵する名品を世に開陳した功績は大きく、後の美術史研究の礎となっている。「自筆調査録」は、そうした相見の研究活動を端的に示す調査・鑑賞記録である。相見の研究過程、交友関係、記録時における作品の所在や伝来等が分かる貴重な資料であると共に、日本美術史学の黎明期の様相を知る上でも格好の資料といえるだろう。

（大森 拓土）

2.2.2 郷土ゆかりの美術鑑賞記～松平家、八重垣神社～

相見香雨は、日米戦争により東京の空襲が激しくなったため、1945（昭和20）年7月5日に松江に帰郷した。はじめ市内雑賀町にあった三島家の別荘に入り、半年後に松陽新報時代の同僚・吉田行精が住職を務める奥谷町の真光寺の離れの二階に移り、1951（昭和26）年3月10日に再上京するまで5年8ヶ月にわたって疎開生活を送った。

この間、相見は山陰各地に出向いて美術品の調査を積極的に行い、また鑑定依頼も多々あり、一方では購入もしている。「自筆調査録」の記録には、作者、作品名などの最小限の記載しかなく、作品の印象やスケッチ、判定評価はほとんど記されていない。しかしこの記録から松江藩内に美術文化が栄えた状



「相見香雨自筆調査録」14-1
1929年



同 28-7 1949年4月23日

況を紐解くことができる。

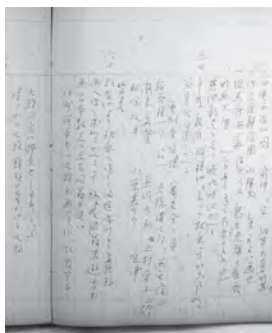
膨大な調査記録の中で注目されるのは、松平家と八重垣神社の記録である。松平家は1929（昭和4）年に行われ現在の国宝や重文作品の内容や寸法、付属品までが詳しく記載され、八重垣神社は1949（昭和24）年の壁画の調査後、重要文化財の指定に導いた。

（藤間 寛）

2.2.3 美術サークル「審美会」の活動

相見香雨は、市内旧家の出身で『松陽新報』を創刊した衆議院議員の岡崎運兵衛と縁戚にあたり、実父の没後同家に寄寓、『松陽新報』入社後次第に古美術に興味を持ったという。相見の疎開中の活動で注目されるのは、松江市内を中心にした出雲地方の古美術調査と、美術愛好家のための「審美会」を行ったことである。

「審美会」は相見の解説による近世の書画を主とした勉強会で、戦後の厳しいインフレの時期にあって1945（昭和20）年11月5日に雲州茶道場（三島家）で最初に開催され、梶谷種一郎、公一、岩橋清四郎、西尾隆二、安来美登、並河太助、上村常子、肥塚政平、小原甚太郎、塩津、皆美などの諸氏が参加している。次いで半月後の11月17日に開き、翌年からは2月17日以降ほぼ毎月催された。会では相見や会員の所蔵品を出陳して評論を行い、参加者の顔ぶれや人数、作品数などは会によりまちまちで比較的自由な雰囲気であった。



「相見香雨自筆調査録」27-3
1945年11月5日



同 29-3 1950年6月23日

1950(昭和25)年6月23日の審美会では、岡崎、村松、木幡、池尻、安来、小村、瀬崎、西尾、和田、三谷が参加し、不昧公生誕二百年記念行事の座談会が行われている。そのほか調査録には郷土の美術研究や指導者として活躍した桑原羊次郎や太田直行、美術家では平塚運一、石橋和訓などの名があり、幅広い交流の跡が知られる。

(藤間 寛)

2.2.4 1910年日英博覧会と相見香雨～審美書院の出店と『特別保護建造物及国宝帖』

1910(明治43)年5月14日から10月29日までの5カ月間、ロンドン西部のシェパーズブッシュに設けられた博覧会場「ホワイトシティ」で開催された日英博覧会(Japan-British Exhibition)は、総入場者835万人を迎えた日英二国間の国家的ページェントであった。この博覧会は1902(明治35)年に締結された日英同盟の継続更新に際し、両国の友好関係を強化するために企画されたものであり、日本が西欧列強と肩を並べる「一等国」であることをアピールしようと日本政府は出品物を厳選した。

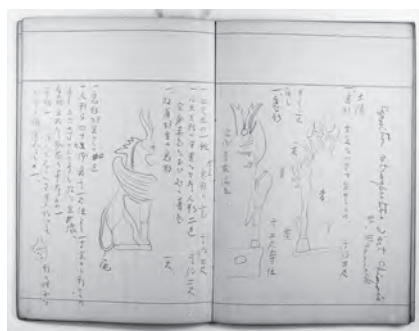
さまざまなパヴィリオンの中에서도見どころとなったのが日本の美術展示で、30点余りの国宝が海を渡りロンドンで展示された。併せて内務省宗教局の編集で約520点の図版と解説を収録した『特別保護建造物及国宝帖』が日本語・英語の両言語で同時出版されることとなり、その印刷を審美書院が担



日英博覧会会場の様子（日本の歴史ジオラマ展示）
Hammersmith and Fulham Archives and Local History Centre蔵



審美書院の出版に関する広告
Official Guidebook より



「相見香雨自筆調査録」1-4
1911年6月22日

うこととなった。「彫刻、絵画及巧藝」の解説を岡倉覚三（天心）が執筆したこの国宝帖は、美術史学において「第二の官製日本美術史」と評価される重要な文献であるが、その編集を担当したのが相見香雨であった。

日英博には審美書院も出店し、主幹の田島志一と相見らが指揮のためロンドンに渡った。博覧会終了後は『国宝帖』のみならず、それまでに出版した豪華美術書を携えてドイツ、フランスの各地を巡回し、各地の美術館・博物館にそれらを寄贈するとともに販促活動を行った。こうして美術愛好家の手にわたった審美書院の書籍が欧州のジャポニスムに与えた影響は大きい。

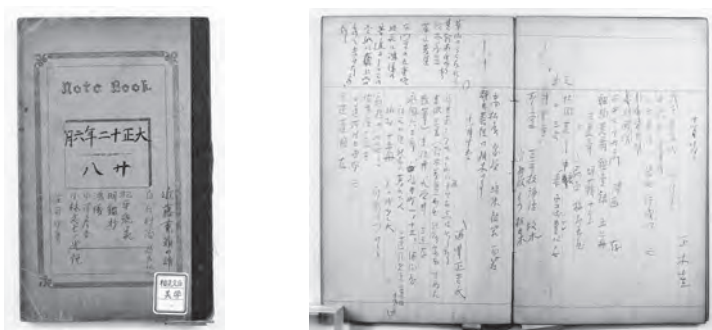
（林 みちこ）

2.2.5 関東大震災と『罹災美術品目録』

1923（大正12）年9月1日午前11時58分、相模湾北部を震源とするM7.9の巨大地震が発生。関東地方全域でM7を超える大規模な余震が翌日夕方まで続いた。さらに地震後、各地から出た火は折からの強風にあおられて瞬く間に広がり、旧東京市内の約40万棟が全焼。関東地方で190万人が被災、10万5千人余が死亡あるいは行方不明になったとされる。

この関東大震災では、東京近郊の旧家、新興財閥、寺社、官公庁などあらゆる種類の美術品所蔵者が被災し、どれだけの美術品が焼失したのかさえ不明という事態となった。美術愛好家の団体「國華俱樂部」会長で東京美術学校校長であった正木直彦（1862～1940）はこれを深く嘆き、震災直後、旧知の相見香雨に罹災美術品の調査を委嘱した。以来、相見は1925（大正14）年まで東京市内外で調査を続け、訪問先はあわせて269カ所に及んだ。この膨大な調査記録『罹災美術品目録』が刊行されたのは1933（昭和8）年8月のことである。

震災後の混乱が続く中、文献もなく関係者の記憶を頼りに進めた当時の調査の様子について、相見は同書凡例で「…幾百千の多蔵家は其主要品のみにても、之を想起すること易しからず、又半焼の家にてはその存亡の明かならざるものあり、又甚だしきは一家族全滅して、之を問ふによしなく、僅に他方面より探知したる所もありき」と生々しく伝えている。



「相見香雨自筆調査録」7-2表紙 および 同本文 1923年11月14日

「自筆調査録」にも、この罹災調査の過程を見出すことが出来る。1923(大正12)年11月からは連日のように所蔵者の名前が記され、そこで確認した美術品の項目には「亡」や「存」、あるいは「全焼」といった語句が書き加えられている。「自筆調査録」には1909(明治42)年以来、職業的に美術鑑賞記が綴られていたが、震災後、その記録は各家から何かが失われてしまったのかを検証するための原簿の役割をも果たしたといえるだろう。

(村角 紀子)

2.3 資料パネル

2.3.1 松江から見た相見香雨

1962(昭和37)年7月21~23日、『島根新聞』文化欄に「相見香雨翁を語る(上)(中)(下)」という記事が掲載された。前年の相見の紫綬褒章受章と同年に迎える米寿を祝し、かねて地元で相見の指導を受けた「郷党」が功績をたたえるために催した座談会の様子である。相見の美術研究の経緯について、地元ならではの知見や意外な素顔が語られる興味深い記事となっている。

司会は宍道町八雲本陣主で美術収集家の木幡久右衛門が務め、松江市内外から相見と縁の深い作家、美術コレクター、古美術商など17名が集った。出



「相見香雨翁を語る(上)(中)(下)」『島根新聞』1962年7月21~23日より
(原本：島根県立図書館郷土資料室蔵)

席者は以下の通り。岡崎信之（市内堅町：相見香雨の縁者）、高井敬正（同石橋町）、塩津正寿（同魚町：彫金家・美術研究家）、安来美登（同本郷町：材木商、美術収集家）、河合忠親（同雑賀町）、本間正夫（同北田町）、森山時雄（同石橋町：醸造業、美術収集家）、本間治夫（同苧町）、金川得助（同寺町：美術商）、小村元太郎（同末次本町：繊維業、美術収集家）、一瀬武夫（八束郡東出雲町）、藤原悦子（松江市大正町）、山本乙介（同殿町：美術商）、米田順市（同）、安達不伝（同西津田町：日本画家）、下山博敬（同人参方）、佐藤宗紹（同寺町：龍覚寺住職）。

2.4 出品リスト

題 名	年 代	所 蔵 者
1. 自筆調査録より		
(1) 相見香雨のライフワーク「琳派」		
「相見香雨自筆調査録」11-2	1927年 8 月	九州大学文学部蔵
「相見香雨自筆調査録」11-4	1927年 9 月	九州大学文学部蔵
「相見香雨自筆調査録」11-5	1927年10月	九州大学文学部蔵
「抱一上人年譜稿」『抱一上人』 (日本美術協会報告 6)	1927年	個人蔵
(2) 郷土ゆかりの美術鑑賞記～松平家、八重垣神社～		
「相見香雨自筆調査録」14-1	1929年 2 ～ 3 月	九州大学文学部蔵
「相見香雨自筆調査録」28-7	1949年 2 ～ 4 月	九州大学文学部蔵
(3) 美術サークル「審美会」の活動		
「相見香雨自筆調査録」27-3	1945年 4 月～1946年 5 月	九州大学文学部蔵
「相見香雨自筆調査録」29-3	1950年 5 ～ 7 月	九州大学文学部蔵
(4) 1910年日英博覧会と相見香雨～審美書院の出店と『特別保護建造物及国宝帖』		
「相見香雨自筆調査録」1-4	1909年11月～1911年 7 月	九州大学文学部蔵
内務省宗教局編『特別保護建造物及国宝帖』（審美書院）	1910年	個人蔵
(5) 関東大震災と『罹災美術品目録』		
「相見香雨自筆調査録」7-2	1923年 6 ～12月	九州大学文学部蔵
「相見香雨自筆調査録」7-3	1923年12月～1924年 2 月	九州大学文学部蔵
『罹災美術品目録』（国華倶楽部）	1933年	筑波大学中央図書館蔵

題 名	年 代	所 蔵 者
2. 「相見香雨自筆調査録」の全容		
「相見香雨自筆調査録」全42帙	1909年8月～1967年7月	九州大学文学部蔵
3. 相見香雨の著作		
「審美書院出版物の英国人に与へたるインプレッションの一例」『美術之日本』2-11	1910年	個人蔵
『雲州餘彩』上・下（芸海社）	1922年	島根県立美術館蔵
「岡崎氏所蔵元信山水圖屏風に就いて」『島根評論』12-1	1935年	島根大学附属図書館蔵
「宗達の仙仏画と「仙仏奇踪」」『大和文華』8	1952年	島根県立美術館蔵
「深江蘆舟の墳墓発見をめぐつて」『大和文華』31	1959年	島根県立美術館蔵
『飛鳥山房十友』（大塚巧藝社）	1962年	島根県立美術館蔵
『相見香雨全集』全5巻（青裳堂書店）	1985～1998年	島根大学附属図書館蔵
資料パネル—松江から見た相見香雨		
「相見香雨翁を語る（上）（中）（下）」『島根新聞』	1962年7月21～23日	原本：島根県立図書館郷土資料室蔵
相見香雨年譜・著作一覧		桑原相見研究会作成
参考展示		
山内長三編「相見香雨翁回想録 その2」『古美術』20号	1967年	個人蔵
関高子遺稿集『婦人解放の大河に生きて』（私家版）	1991年	個人蔵
森山時雄著『一老美術史家・相見香雨の回想』（私家版）	1985年	島根大学附属図書館蔵
ディスプレイ		
「相見香雨自筆調査録」デジタル画像		桑原相見研究会撮影

河本家古典籍のデジタル化プロジェクト

島根大学学術国際部図書情報課

情報サービスグループ 昌子喜信

1. はじめに

鳥取県東伯郡琴浦町の国指定重要文化財河本家住宅には、約880点余（約4,800冊）に上る古典籍が伝来している。島根大学附属図書館（以下「本学図書館」という。）は、国指定重要文化財河本家住宅保存会（以下「保存会」という。）と共同で、（公財）図書館振興財団の平成26年度提案型助成事業に応募し、採択された。これにより2014（平成26）年度から3か年計画で進めたデジタル化事業のこれまでの経緯と成果を報告する。

2. 河本家について

2.1 河本家由緒

河本家は、尼子氏の重臣を祖先に持ち、江戸時代を通じて代々大庄屋を務めた家である。その由緒と歴代については、保存会会長小谷恵造氏の論文¹⁾に詳しい。その概略を同氏の論文に依って記すと以下のとおりである。

河本家の初代弥兵衛^{たかひで}隆任は、尼子氏の十家老のうちの一人とされ、戦国時代の末期に八橋郡赤崎（現在の鳥取県東伯郡琴浦町赤碕）に移り住んだ。三代長兵衛は、松江城主堀尾忠晴の孫の菊姫を妻に迎えたとされ、そのことを示すものとして、同家の記録や墓碑のほか、菊姫が持参したとされる螺鈿細工を施した長刀が伝えられている²⁾。

三代長兵衛の長男長兵衛は、1657（明暦3）年の江戸の大火によって焼失した鳥取藩藩邸の再建のために、材木を江戸に搬送した功績が認められて、母の出身である堀尾姓を名乗ることを許された。

その頃三代長兵衛の次男甚右衛門は河本家四代として分家し、やがて五代弥三右衛門が寛文年間（1661～1673年）に住居を赤崎から^{のつ}筧津（現在の鳥取県東伯郡琴浦町筧津）に移した。国指定重要文化財になっている母屋などは、この弥三右衛門の時代の1688（貞享5）年に建築されたものである。

以後、十二代伝九郎通繕まで、養子だった八代の元昌を除き、大庄屋、宗旨庄屋等の郡役人を代々務めた。明治維新以後、十三代芳蔵は館号を「稽古有文館」と名付け、学問を鍛えることを同家のモットーとし、十四代猷蔵は東京帝国大学文学部で東洋史を修めた。河本家住宅は、建築年代が明らかな民家としては山陰地方で最古に属するものであり、国指定重要文化財に指定されている古民家で家の歴史がこれほど明らかなのは珍しい³⁾。現在の当主、雅通氏は第十六代にあたる。

2.2 蔵書

河本家「稽古有文館」に伝わる蔵書は古典籍880点余（約4,800冊）からなる大規模な蔵書である。河本家古典籍の蔵書調査は、米子工業高等専門学校の原豊二氏（現在の所属はノートルダム清心女子大学）らにより開始され⁴⁾、2004（平成16）年度以降、国文学研究資料館に調査が引き継がれて、2014（平成26）年度まで10年間にわたって同館による調査が行われた。

蔵書の特徴や分野ごとの主要な古典籍の解題については、原豊二氏の論文⁵⁾に詳しく述べられている。それによると、多くは江戸時代の版本であり、中には明治期の版本や、江戸時代の写本も含まれ、その分野は、文学・歴史・仏教・漢籍など多岐にわたっている。その蔵書は、江戸時代から明治・大正期にかけて収集されたものと考えられ、特に十二代伝九郎通繕、十三代芳蔵の頃に収集されたものが中心となっていると考えられている⁶⁾。蔵書の分野別割合を次に示す（図1）。

なお、河本家古典籍は後述するように、2016（平成28）年より島根大学附属図書館に寄託されている。

3. 図書館振興財団助成事業

（公財）図書館振興財団の平成26年度提案型助成事業に採択された「「稽古有文館」に伝わる史資料のデジタル化とデジタルアーカイブ関連携公開事業」は、河本家「稽古有文館」の蔵書をデジタル化して公開することにより、河本家に伝わる特色ある古典籍コレクションの調査・研究を支援することを目的とするものである。本事業によってデジタル化されたコンテンツは、史資料を中心とするクラウド型デジタルアーカイブのプラットフォームである

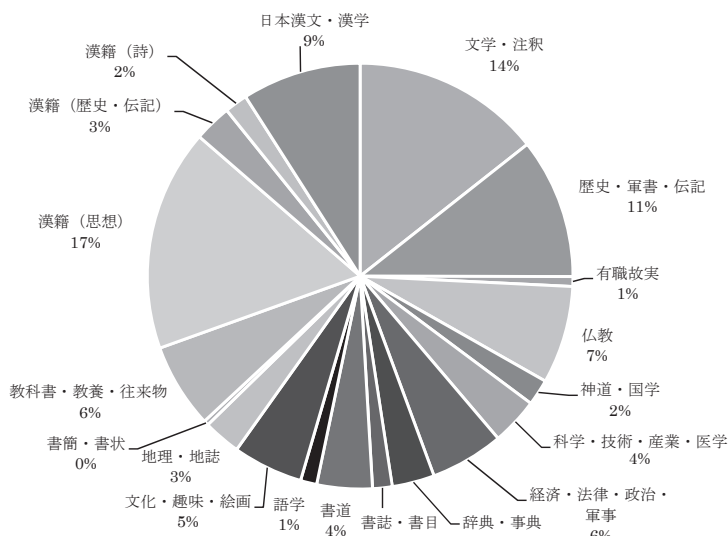


図1 河本家古典籍の分野別割合
(原, 山藤. 稽古有文館 (河本家) 蔵古典籍目録⁷⁾. より作成)

ADEACから公開し、あわせて、既に同蔵書の一部の古典籍を公開している島根大学附属図書館デジタルアーカイブ（以下「島大アーカイブ」という。）とADEACを双方向に連携する実証実験を行うことによって、デジタルアーカイブ間の連携によるコンテンツの相互活用を検証することを目指した。以下、3か年計画で実施している事業の概要を示す。

3.1 デジタル化

国文学研究資料館による調査が行われ、調査カードが作成されている古典籍の内、約170点（約600冊）を対象としてデジタル化を行う計画である。メタデータは、国文学研究資料館の調査カードのデータを元に作成することにし、同資料館から調査済みの調査カードの画像データ及びExcelファイルに入力された調査データの提供を受けた。

本事業によってデジタル化した古典籍は、次のとおりこれまで数次に分けて公開しており、本稿執筆中の現在も撮影を継続中である。

2014（平成26）年度

第1次公開（2015年4月27日） 65点（147冊）

2015（平成27）年度

第2次公開（2015年10月9日） 1点（34冊）

2016（平成28）年度

第3次公開（2016年10月30日） 49点（127冊）

撮影済み未公開 28点（91冊）

撮影中 28点（236冊）

3.2 デジタルアーカイブ間連携実証実験

複数のデジタルアーカイブを連携させることによる利用促進の効果を検証するために、デジタルアーカイブ間の連携実証実験を行った。連携するデジタルアーカイブは、島大アーカイブとADEACである。

島大アーカイブは地域史資料のアーカイブとして、地域の個人や博物館等の機関が所蔵する史資料のデジタル画像を蓄積・保存し、活用のためのプラットフォームを提供している。

ADEACは、全国各地の史資料や自治体史の公開を目的とするクラウドシステムとしてすぐれた機能を持つもので、ADEACに搭載された史資料や自治体史を対象とする横断検索機能を持っている。

この2つのデジタルアーカイブの双方に、連携先システムのメタデータを搭載して統合的に検索を行い、連携先システムのコンテンツの画像データを表示する形で連携を実現した（図2）。ADEACには、島大アーカイブ上に既に登録されている河本家古典籍と本学図書館の代表的なコレクションである桑原文庫のメタデータを搭載し、島大アーカイブには、ADEAC上の河本家古典籍のメタデータを搭載した。2016（平成28）年12月現在の搭載しているメタデータ件数は次のとおりである。

ADEAC上の島大連携メタデータ

河本家古典籍 133件（11点133冊）

桑原文庫 727件（194点727冊）

島大アーカイブ上のADEAC連携メタデータ

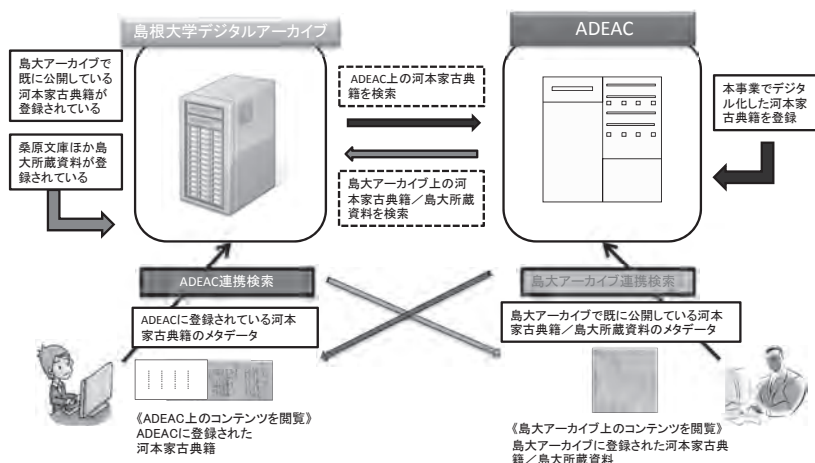


図2 デジタルアーカイブ間連携実証実験

河本家古典籍 181件（66点181冊）

4. ADEACからの公開

4.1 ADEACの基本機能

ADEACの画面上では、「河本家古典籍」と「島根大学所蔵古典籍」の2つの入り口を設けた。「河本家古典籍」では、原豊二氏作成の目録の分野区分に従って分野ごとのインデックス画面を作成した。また、「島根大学所蔵古典籍」では島大アーカイブ上の桑原文庫を検索するために、桑原文庫のインデックス画面を作成した。図3に、河本家古典籍を閲覧する際の画面遷移を示す。

4.2 ADEACの特徴的な機能

4.2.1 横断検索

ADEACに搭載されている全てのコンテンツを対象とした横断検索が可能である。横断検索は、目録（メタデータ）または本文を対象として検索を行う。本文検索は、搭載されている自治体史などの本文テキストや古典籍・古文書の解説テキストを対象に検索するものである。

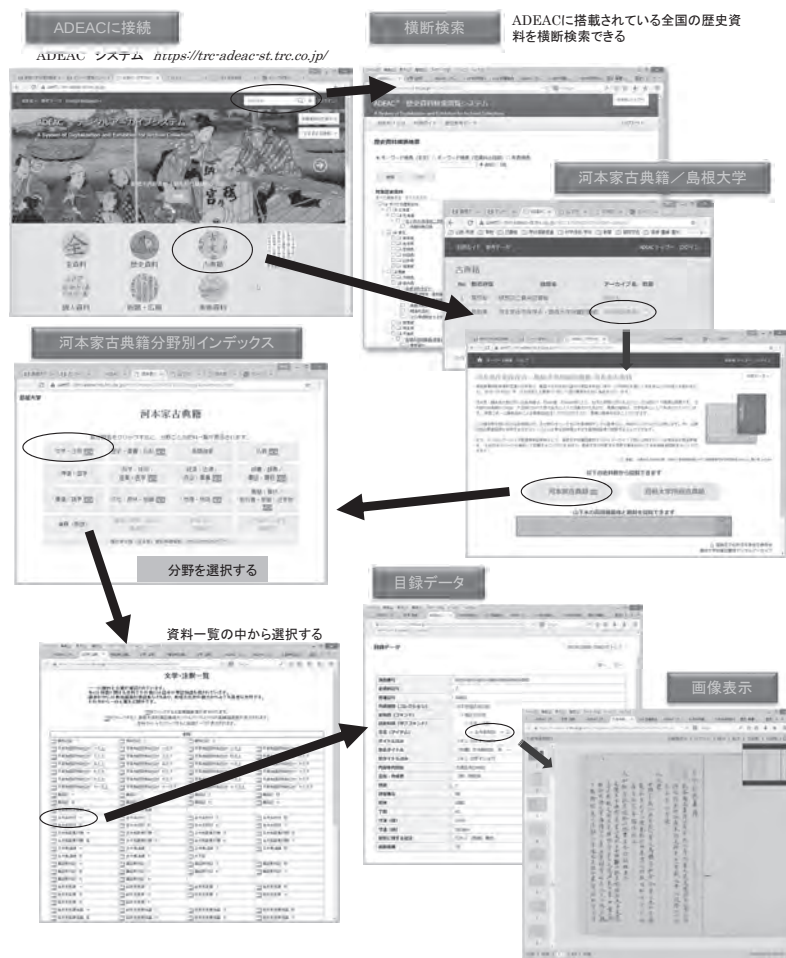


図3 ADEAC画面移行

4.2.2 解読テキストの並べ・重ね表示

古典籍・古文書の解読テキストが搭載されている場合は、画像と解読テキストを画面上で並べて表示したり、重ね合わせて表示したりすることができる。河本家所蔵の『山下水』は、山崎真克氏により翻刻されているため⁸⁾、この解読テキストを搭載し、テキストの並べ・重ね表示を実現した。その画面例を図4に示す。

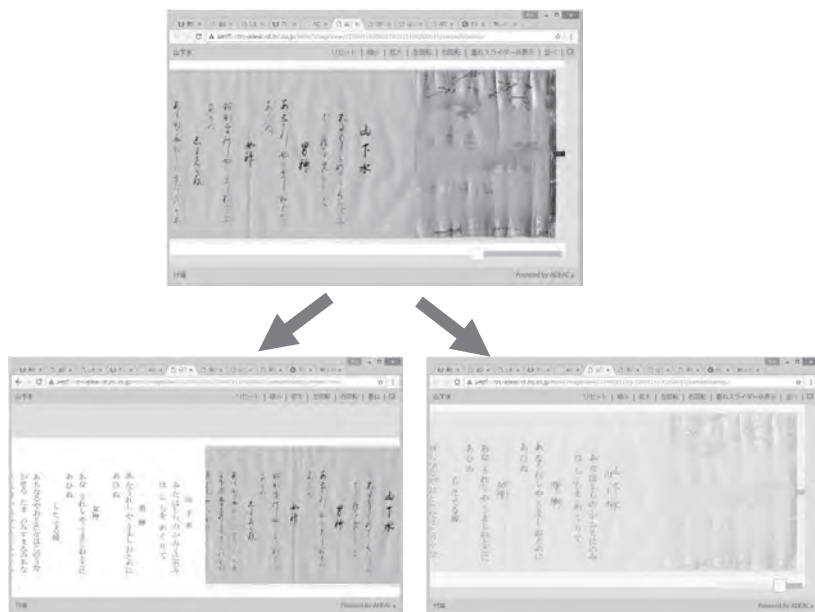


図4 画像と解読テキストの並べ表示（左下）、重ね表示（右下）

4.3 デジタルアーカイブ間連携検索

デジタルアーカイブ間連携検索の実際は、次のとおりである。

4.3.1 ADEACから島大アーカイブへの連携

ADEAC上から検索可能な島大アーカイブ上に登録されている河本家古典籍と桑原文庫の古典籍は、ADEACの分野別一覧画面及び目録詳細画面に青色のカメラ・アイコンを表示し、ADEACに画像が登録されている河本家古典籍（赤色のカメラ・アイコン）と区別できるようにした。ADEACから島大アーカイブ上のコンテンツを画像表示する場合は、この青色のアイコンをクリックすることで、島大アーカイブにリンクして画像を閲覧できる（図5）。

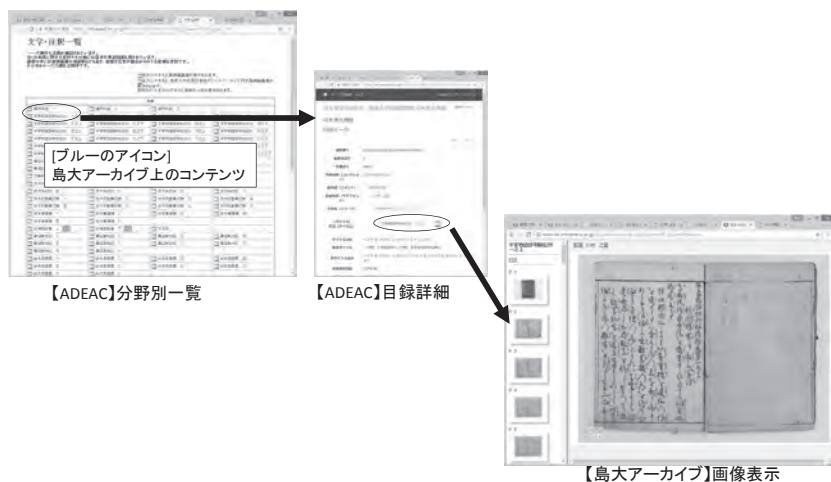


図5 ADEACから島大アーカイブ上のコンテンツを閲覧

4.3.2 島大アーカイブからADEACへの連携

島大アーカイブ上から検索可能なADEAC上の河本家古典籍は、一覧画面にサムネイル画像なしで表示（島大アーカイブ上のコンテンツはサムネイル画像を表示）し、目録詳細画面でADEACへのリンクを表示した（図6）。

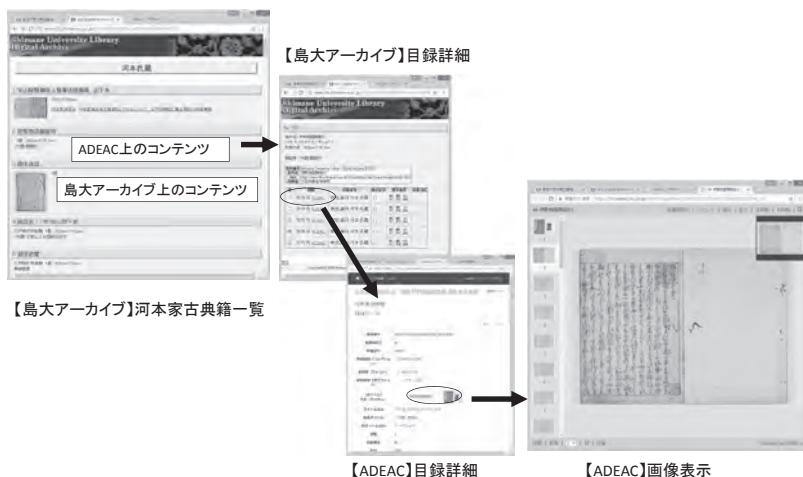


図6 島大アーカイブからADEAC上のコンテンツを閲覧

5. アクセス件数

5.1 月別アクセス件数の推移

ADEACでの河本家古典籍公開後の月ごとの画像表示回数の推移を図7に示す。また、1冊当たりの月ごとの画像表示回数の推移を図8に示す。第2次公開（2015年10月）以後は、月に6,000～11,000回の画像表示回数を維持している。また、1冊当たりの画像表示回数は、月にほぼ20回～50回の間で推移している。

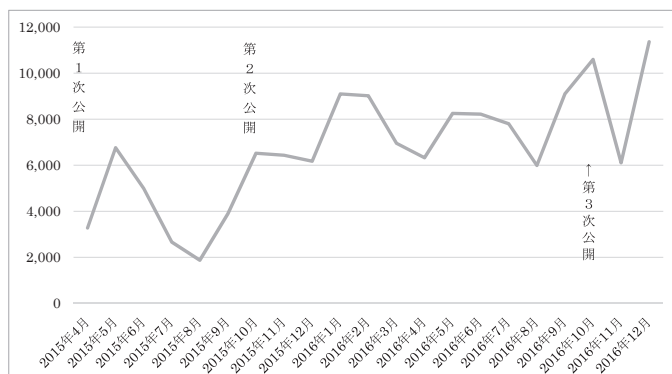


図7 画像表示回数の推移

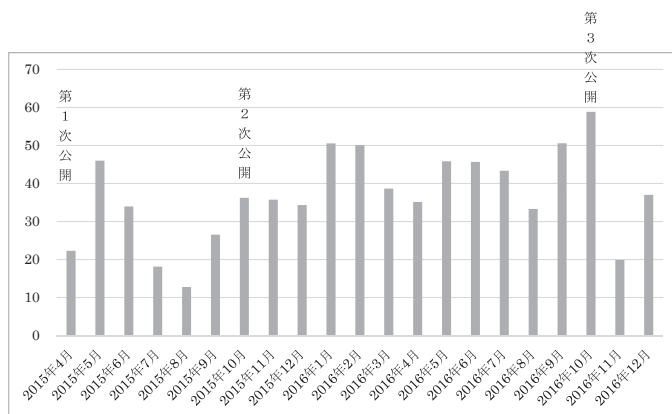


図8 1冊当たりの画像表示回数の推移

5.2 デジタルアーカイブ間連携実証実験の効果検証

ADEACを経由した島大アーカイブ上の画像の閲覧状況を表1に示す。

表1の①欄は、島大アーカイブ上の桑原文庫と河本家古典籍の画像表示回数をそれぞれ表している。②欄は、ADEACの分野別一覧画面及び目録詳細画面にある島大アーカイブ上の連携コンテンツへのリンクである青色のカメラ・アイコンをクリックした回数を表す。青色のアイコンをクリックした後、中間ウィンドウ（「まもなく、島根大学デジタルアーカイブへ移動します。…」という表示がでる）を経由した後、島大アーカイブ上の画像が表示される。画像が表示される前に中間ウィンドウを閉じてしまうケースもあると考えられ、実際に画像を表示した回数は②欄の数値よりも少ないと考えられる。

②欄の数値がADEACを経由して島大アーカイブ上の画像表示回数を表したのではないため、必ずしも正確なことは言えないが、島大アーカイブ上の桑原文庫の画像表示総回数（①欄）の内、多くの割合がADEAC経由と考えられる。一方、島大アーカイブ上の河本家古典籍の画像表示回数（①欄）は、②欄よりも大きくならなければならないにもかかわらず小さくなっているのは、青色アイコンをクリックした後、画像が表示される前に中間ウィンドウを閉じてしまったことなどによると思われる。

表1 ADEACを経由した島大アーカイブ上の画像閲覧回数

	①島大アーカイブ上の画像表示 総回数	②ADEAC上での島大連携コン テンツへのリンクのクリック回 数
桑原文庫	81,767	40,346
河本家古典籍	14,933	20,199

* 集計期間：2015.4～2016.12

島大アーカイブを経由したADEAC上の画像の閲覧状況を表2に示す。

表2の①欄は、ADEAC上の河本家古典籍の画像表示総回数を表している。②欄は、島大アーカイブを経由した画像表示回数である。島大アーカイブを経由してADEAC上の画像を閲覧する回数は非常に小さいことがわかる。

表2 島大アーカイブを経由したADEAC上の画像閲覧回数

	①ADEAC上の画像表示総回数	②島大アーカイブ経由の画像表示回数（①の内数）
河本家古典籍	141,459	267

* 集計期間：2015.4～2016.12

デジタルアーカイブ間連携実証実験の結果から、ADEACから島大アーカイブ上のコンテンツの利用において、大きな効果があることが分かった。ADEACは、公開準備中を含めて55機関が参加するシステム（2016年10月現在）であり、史資料の分野におけるアグリゲーターとみなすことができる。島大アーカイブのような個別アーカイブが、アグリゲーターとしてのADEACとメタデータレベルで連携することにより、個別アーカイブにとってはコンテンツの可視性を高め、利用率の向上を図ることができる。

一方でADEACにとっては、ADEACに参加していない個別アーカイブとメタデータレベルで連携することによって、個別アーカイブのコンテンツを統合的に検索することが可能となり、ADEACから利用できるコンテンツを豊富化することができる。

6. 資料保存対策

デジタル化の作業を進めるにつれて、資料の保存状態が非常に悪い状況であることが分かってきた。多くの資料に虫の被害が見られたが、虫の被害は過去のものではなく、現在も進行中であることは明らかだった。資料によってはカビの被害を受けているものも見受けられた。

河本家ご当主と保存会会長に現状を報告し、一旦デジタル化作業を中断して、保存対策を優先することにした。速やかに殺虫処理をして虫の被害を食い止める必要があったが、本学図書館の二酸化炭素による殺虫処理設備では、一度に処理できる量が少なく、膨大な量の資料全部を処理するためには、何度も繰り返し行う必要があり、現実的とは思われなかった。また、二酸化炭素では、虫に対しては有効であるが、カビには効果がないことも問題であった。そこで、島根県立古代出雲歴史博物館（以下「歴博」という。）に相談し、燻蒸設備を借り受けることになった。燻蒸処理の対象は、大小の木箱40箱、文書箱48箱に収納された古典籍全点である（写真1）。

事前作業として、2015（平成27）年9月に2日間かけて、目録リストと資料現物の照合作業を行った。歴博での燻蒸作業は2016（平成28）年1月～2月にかけて2回にわたって行うことになり、歴博への搬入に先立ち、保存会のメンバーが木箱を養生材で梱包した。資料の運搬は琴浦町教育委員会のトラックを使用して一度にすべての資料を搬入した（写真2）。

歴博での燻蒸処理は、燻蒸庫内に資料を置き、エキフュームを投入して1週間処理する方法で行われた。2回の処理がすべて終わったのち、再び木箱を梱包して、資料を搬出した。河本家において資料の収蔵施設が整備されるまでの緊急避難的な措置として、当面島根大学で資料を寄託受けすることにし、法文学部の一部屋と附属図書館の第二貴重資料室に資料を搬入し、保管している（写真3）（写真4）。



写真1 河本家土蔵内の木箱の収納状況



写真2 島根県立古代出雲歴史博物館への搬入



写真3 法文学部



写真4 附属図書館第二貴重資料室

7. 成果公開

河本家住宅の春・秋の公開に合わせて、プロジェクトの成果報告として、これまでに次のような講演及びシンポジウムを行っている。

2015（平成27）年4月29日

講演 「河本家古典籍から見る江戸文学の世界」

田中則雄 島根大学法文学部教授

講演 「河本家古典籍のデジタル化と公開Ⅰ」

昌子喜信 島根大学附属図書館情報サービスグループ・リーダー

2015（平成27）年10月11日

講演 「江戸後期の長編小説—『絵本忠臣蔵』をめぐって—」⁹⁾

田中則雄 島根大学法文学部教授

講演 「河本家古典籍のデジタル化と公開Ⅱ」

昌子喜信 島根大学附属図書館情報サービスグループ・リーダー

また、3年間のプロジェクトの最終年度である2016（平成28）年10月に琴浦町生涯学習センター「まなびタウンとうはく」においてシンポジウムを開催した。このシンポジウムは、河本家古典籍のこれまでの調査・研究及びデジタル化の経緯と到達点を報告し、今後の展望を考えることを目的としたものである（写真5）。

2016（平成28）年10月30日

シンポジウム

基調講演「河本家の古典籍の全体像と特色—調査開始以来の歩み—」¹⁰⁾

原 豊二 ノートルダム清心女子大学文学部准教授

パネルディスカッション

コーディネータ：田中則雄（島根大学法文学部教授）

パネリスト：坂本敬司（新鳥取県史編さん委員会近世部会委員）

原 豊二（ノートルダム清心女子大学文学部准教授）

山崎真克（比治山大学現代文化学部教授）

昌子喜信（島根大学附属図書館）



写真5 シンポジウム

8. 課題と展望

3年間のプロジェクトは、河本家古典籍をデジタル化して公開することを直接的な目的としたものであるが、当初の目的を達成したことのほかに、当初計画にはなかった資料保存対策など資料管理の面で副次的な成果をあげることができた。また、シンポジウム開催により、河本家古典籍の調査・研究の現況を確認し、今後取り組むべき方向性を示すことができた意義は大きい。

ここで、本プロジェクトの成果を今後に引き継ぎ、発展させていくために課題を整理しておきたい。課題の第1は、デジタル化の継続である。本プロジェクトにおいてデジタル化した点数は171点（643冊）であり、河本家古典籍の約1割である。虫損のため、撮影に適さないものを除き、古典籍コレクション全体のデジタル化を行うことが望ましい。そのためには、引き続き外部資金の獲得を模索し、デジタル化を継続していく必要がある。

課題の第2は資料の活用についてである。河本家古典籍の活用は、研究面、教育面、地域における資料活用の面のいずれにおいても、まだ始まったばかりと言える。デジタル化と公開を継続して進めることによって資料の活用の基盤が整い、活用の促進が期待されるが、活用を一層進めるためには、デジタル化されて公開されているコンテンツを使用するためのハードルをできる

だけ低くしておくことが望まれる。そのために、コンテンツの使用にあたって、事前申請により許諾を得る手続きをしなくてもよいように、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス¹¹⁾等のライセンスをコンテンツに付与することの検討が望まれる。

謝辞

河本家ご当主の河本雅通さんご夫妻、保存会の小谷恵造会長はじめ保存会の皆さん、琴浦町教育委員会の林原克幸さん及び池口由美子さんには、助成金の申請からプロジェクトの推進に至るまで種々ご協力いただきました。また、田中則雄島根大学法文学部教授、原豊二ノートルダム清心女子大学文学部准教授、山崎真克比治山大学現代文化学部教授には、プロジェクトを進める際に貴重なアドバイスをいただくとともに、シンポジウムの開催にあたって多大なるご協力をいただきました。そして、島根県立古代出雲歴史博物館の澤田正明主任学芸員には、資料の燻蒸においてご協力いただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

注・参考文献

- 1) 小谷恵造. 鳥取の旧家河本家の由緒と保存文書から. 水戸史学. 2005.11, 第63号, p.2-17.
- 2) 山陰中央新報. 2008.2.18の記事による。
- 3) 河本家住宅は2010（平成22）年に国の重要文化財に指定された。なお、河本家住宅の調査報告として、次の文献がある。
鳥取環境大学浅川研究室編集. 河本家住宅：建造物調査報告書. 琴浦町教育委員会, 2005.3, 98p.
- 4) 原豊二, 山藤良治. 稽古有文館（河本家）蔵古典籍目録. 米子工業高等専門学校研究報告. 2001.12, 第37号, p.71-84.
- 5) 原豊二. 稽古有文館（河本家）蔵古典籍解題. 米子工業高等専門学校研究報告. 2003.12, 第39号, p.62-68.
- 6) 原豊二. 河本家の古典籍の全体像と特色：調査開始以来の歩み、あるいは『百番歌合』のこと. 淞雲. 2017.3, 第19号, p.93-104.
- 7) 前掲4)
- 8) 山崎真克. 河本家稽古有文館蔵『山下水』について：江戸初期松江藩主周辺の和歌事跡. 古代中世国文学. 2006.6, 22号, p.78-90.

9) 田中則雄氏の講演に関連して、次の文献を参照のこと

田中則雄. 河本家に伝存する近世実録と読本. 松雲. 2016.2, 第18号, p.68-89.

10) 原豊二氏の基調講演に関連して、前掲6) の文献を参照のこと

11) “クリエイティブ・コモンズ・ライセンスとは”. Creative Commons Japan.
<https://creativecommons.jp/licenses/>, (参照2017-01-10).

第1回中日若手科学技術担当者交流計画に参加して

島根大学学術国際部図書情報課

医学情報グループ 佐藤 陽子

1. 中日若手科学技術担当者交流計画とは

私は2016（平成28）年10月9日から15日まで、中華人民共和国（以下、中国）の中国科学技術部による中日若手科学技術担当者交流計画に参加し、中国を訪問しました¹⁾。

この計画で中国に赴いたのは78名（写真1）。参加者の半数以上は国立の研究機関や国公立大学の40歳以下の教職員で、中央省庁や地方自治体の職員の方も参加されていました。なお、事務職員の方はおられましたが、図書館職員は私以外にはいませんでした。

当計画の背景にあるのは、科学技術振興機構（以下、JST）が2014（平成26）年度から始めた「さくらサイエンスプラン」です。これは、高校生以上40歳以下の東アジア地域の青少年を日本に招待し、日本の科学技術に触れてもらうためのプログラムで、行政官も対象となります²⁾。島根大学でも、これまでにさくらサイエンスプランを利用した学生や教員の短期招聘が行われています^{3~4)}。今計画の参加者に話を聞いたところ、さくらサイエンスプランで海外からの学生などを受け入れた経験があるか、今後受け入れる予定の研究室や部署に関わりのある方が多いようでした。

中日若手科学技術担当者交流計画は、さくらサイエンスプランの意義を認めた中国科学技術部によって立ち上げられたそうです⁵⁾。

すなわち、さくらサイエンスプランの中国版が中日若手科学技術担当者交流計画だと言えるかもしれません。



写真1 交流計画の全参加者

表1 日程表

月 日	時 間	内 容
10/ 9 (日)	17:00～19:00	歓迎レセプション
10/10 (月)	9:00～12:00	座談会 下記局・部の方による講演および質疑応答 1) 中国外交部アジア司北東アジア署日中関係担当 2) 科技部イノベーション発展司企画担当 3) 環境保護部 4) 農業科学部 5) 科技協力部 6) 知的財産部国際交流司
	14:00～16:30	清華大学訪問 1) 清華大における科学技術研究についての説明 2) 清華大の重点実験室についての説明 3) 国際交流の現状についての説明 4) 清華大学見学
10/11 (火)	9:00～10:10	中国科学院 戦略諮問研究院訪問 1) 概要の講演 2) 日本側代表挨拶 3) イノベーション政策研究分野についての講演 4) 学部研究支援についての講演 5) 持続的発展研究分野についての講演 6) ディスカッション
	10:50～11:50	中国科学院物理研究所訪問 1) 概要の講演 2) 国家実験室（再生エネルギー分野）見学
	14:00～15:00	中関村ハイテク産業開発区訪問 1) 担当者の方による説明 2) 質疑応答 3) 中関村創業大通り見学
	15:30～17:00	中国科学技術館見学
10/12 (水)	10:30～12:00	天津市科学技術委員会訪問
	13:00～14:30	天津科技大学訪問 1) 重点実験室（食品安全分野）見学 2) 重点実験室（発酵微生物分野）見学 3) 化工与材料学院見学
	15:00～17:00	天津国際生物医薬総合研究院訪問 1) 概要説明 2) 実験室見学 3) インキュベーター部署見学
10/13 (木)	9:00～10:00	天津市濱海高新技术産業開発区 有限公司「天地偉業」科学技術見学
	10:20～11:00	有限公司「天堰」科学技術見学
	14:00～19:30	天津五大道、海河等見学
10/14 (金)	13:00～15:00	自由行動
	17:00～19:00	訪中団総括並びに立食送別会 団員による中国訪問の報告会
10/15 (土)	9:00～10:30	故宮文化資産デジタル化応用研究所見学 1) 凸版印刷担当者による説明 2) 故宮見学

※時刻は全て現地時間。移動時間等は省略した

2. 各日の見学・訪問先

参加者ははじめ北京各所にうかがい、4日目から2組に分かれて天津市・山東省の各科学技術関連施設や企業を視察して地元の大学教員の方等と交流しました（表1）。私は天津市に向かうグループに振り分けられたので、本稿では北京および天津市での訪問について記します。計画で定められていた訪問先は、全て理工学・化学・医学の研究分野に関連する研究所等で、大学附属の図書館や公立図書館内部の見学はありませんでした。

初日は歓迎会があり、実際に視察が始まったのは2日目からでした。

2日目午前中は、座談会と称して複数の部署の行政官の方から簡単な講義がありました（写真2）。まず、日中国交正常化以降の日中関係の概略について講義があった後、中国が現在進めている13次5



写真2 座談会の会場

か年計画に基づいて、技術革新や研究開発を重視するイノベーション型国家の樹立が目指されていることや、環境問題の改善、農業分野の所得向上と作物の品質・流通の上昇、知的財産の保護について力を入れていることが語られました。各議題の終わりには質疑応答の時間が設けられており、日本側参加者からの質問が相次ぎました。

午後からは清華大学に赴きました。清華大学は1911(明治44)年に創設され、特に工学系分野の研究において世界的に知られています。日本語のスライドを用いて大学概要が説明された後、清華大学とトヨタ自動車が共同で開設している研究センターについての講演があり、長年日本のトヨタ自動車で勤務しておられた中国人研究者の方から日本語で研究内容をうかがいました。その後、清華大学構内の歴史的建造物等を巡りました。

3日目の午前中にうかがったのは中国科学院でした（写真3）。中国科学院は中国の科学技術の最高諮問機関であり研究機関ですが、大学院を備えて

いることから分かる通り、研究のみならず教育にも力を入れています。続いて同院の物理研究所に移動して説明を受けた後、中国政府が出資している研究施設へ向かいました。超伝導体、素材と構造、クリーンエネルギーの3分野の研究室の中から参加者が見学したい研究室を選択する形式がとられました。私はクリーンエネルギー部門の研究室を選び、リチウムイオン電池の開発・研究の現場で研究室の教員から説明を受けました。

午後からは中関村ハイテク産業開発区・サイエンスパークに行きました(写真4)。ここでベンチャー企業を興そうと志す人々への支援が行われており、各企業の展示場も併設されています。過去

にサイエンスパークから起業した例としてはパソコンメーカーのレノボがあり、現在も同パーク内に清華大学や人民大学の学生によるベンチャー企業があるとのこと。シリコンバレーにあるカフェをモデルにしたという担当者の方のお話の通り、サイエンスパークの通りに面して複数のカフェが立ち並んでいました。また、店内では多くの人々がノートパソコンをひろげ、商談をしている方もいるようでした。

4日目からはグループに分かれての行動が始まり、私が振り分けられたグループは高速鉄道で天津市に向かいました。天津市にはかつて日本も含めた諸外国の租界が設けられたこともあり、日本に例えるのであれば、横浜や神戸のような風情がある都市です。天津市の科学技術委員会では科学技術に関する市の概要を聴きましたが、大学の研究機関などの招致に力を入れているとの印象を受けました。



写真3 中国科学院



写真4 サイエンスパークにある
「創業大通り」

午後からは天津科技大学の重点実験室を2か所訪ねました。重点実験室は、国から設備面や資金面で特に厚い援助を受けた研究室の名称です。成果報告は論文発表によってなされ、研究テーマは科学技術院が決めた上で天津市の教育委員会が研究の場所を選定するというお話でした。次に、同学の化



写真5 化工与材料学院内の展示室

工与材料学院に移動しました。長年にわたり塩化学研究を行っているとのことで、さまざまな結晶や塩を利用した製品が並ぶ学内の塩の展示室を案内していただきました（写真5）。案内者は日本に留学した経験のある若手研究者の方でした。

続いて、天津市と国が共同で設立した天津国際生物医薬総合研究院に赴きました。ここは、創薬の基礎研究から臨床実験、製品化、製薬企業による製造および販売まで行うことが可能な大規模な施設でした。医薬臨床実験については唯一中国で認証された研究所とのことで、日本の医学関係の研究者に対して研究協力を呼びかけていました。大学院生の育成や、ベンチャー企業の支援もしているそうです。

5日目は濱海高新技术産業開発区にてベンチャー企業を2社訪問しました。1社目は天地偉業という中国随一の監視カメラ製造会社で、部品製造およびシステム開発をしています。行政や金融機関向けの製品が多く、学校内のカンニング防止用のカメラや、リオオリンピックでの監視カメラもこの天地偉業のものということでした。社員の平均年齢は28歳で、天津大学や南京大学など地元大学出身の方が多くということです。福利厚生に力を入れ、インセンティブとして優秀な社員には海外製の乗用車などを支給しているという話でした。社内の実験室では研究開発をしています。社長がもともと天津大学の教員ということもあり、同大学との共同研究も行っています。企業立ち上げから短期間のうちに成功した理由は、大学との共同体制にあるという話でした。

2社目は天堰という主に教育用の医療機器等を作成している会社です。特

筆すべきは、中医学、つまり中国の伝統医学用の医療教育機器も制作されているという点です。たとえば脈診や鍼灸治療を体験できる人体模型や、漢方に用いられる生薬の写真と効用が分かるデータベース等がありました。制作した人体模型等を利用して医学生を対象に医学教育を行うほか、日本で



写真6 医学生教育用の部屋

いうOSCE⁶⁾に相当する試験の会場も提供しているとのことでした(写真6)。

6日目は北京に戻り、天津市・山東省それぞれの訪問先での様子を報告しました。7日目は凸版印刷と故宮博物院とが共同で運営する故宮文化資産デジタル化応用研究所を訪問しました。帰路の飛行機の便ごとにグループにわけられ、かつての故宮の様子をヴァーチャル・リアリティで再現した映像を視聴した後、故宮博物院エリア内に現存する建築物を見学しました。

3. 各日の交流会

このたびの計画では、施設見学等の間に多くの歓迎会や交流会が催されました。

初日は、北京国際空港から宿泊地のホテルに向かった後、休憩をはさんで夕餐を兼ねた歓迎会がありました。8人掛けの円卓が複数用意され、日本側の参加者のほか、中国側の研究者や職員等が同じ円卓を囲みました。私の近くの席におられた中国人研究者の方は、日本に留学した経験があるとのこと、日本語を交えながら座を盛り上げてくださいました。更に、JST特別顧問の沖村氏や、在中国日本国大使館の方など、今回の交流計画の実現に尽力された方々が登壇し、今回の交流計画への期待を語られました。

4日目の夕方には、天津大学の研究者の方なども同席した歓迎会が開かれました。会場には自分で包子を作るコーナーが設けられていました。地元の芸能が披露されるなか、白酒と呼ばれるアルコール度数の高い酒がふるまわれて何度も乾杯の声があがるなど、非常に賑やかな会となりました。私はほとんどお酒が飲めないのですが、特に強要されることもなく、気兼ねなく現

地の研究者の方とお話しすることができました。

日本人の参加者間での交流も深まりました。各日の食事の場や、移動時間、自由時間中は、みなさんが積極的に名刺を配っては自身の研究の話をされており、和気藹々とした雰囲気でした。最終日が近づくにつれ「皆と別れるのが寂しい」とおっしゃっている参加者の方がおられたほどです。6日目の報告会がてら行われた立食式送別会では、最後の顔合わせの機会だからと、参加者同士で名残惜しそうに挨拶を交わす姿がみられました。

4. 感想

今回の訪問は、中国科学院を始めとする中国科学技術の最先端を担う各研究施設を視察し、担当者の方から直接お話をうかがうことができるという非常に貴重な機会でした。各施設で受けた説明が専門的な内容を多く含んでいたことや、研究者同士での交流が盛んであったことを考えると、今プログラムは、研究職の方やさくらサイエンスプランに直接関わる職員が参加してこそ真価を発揮するものと感じます。しかし門外漢であっても、以下2点について、やはり参加する意義があったと思っています。

1点目は、外国語の習得への強い意欲が湧いてきたことです。モチベーションの源は、自由時間中、個人的に北京大学の図書館と国家図書館に入館を試みるという体験をしたことです。両館とも入館手続きが必要だったため、入口まで足を運びながらも悩んだ末に見送りました。これまでも通常業務の中で日本語以外の言葉を学ぶ必要性は感じていましたが、今回は、もし中国語や英語を的確に話すことができれば問題が解決したかもしれない場面だっただけに残念でした。次回、なんらかの機会が巡って来たときには見学できる機会を逃さないよう、語学習得に努めたいと思います。

2点目は中国での研究現場の様子的一端に触れることで、留学生の研究生生活について思いをはせる契機を得たことです。図書館で出会う海外からの留学生の方たちとお話していると、つい、その場その場の対応に終始してしまい、彼らがどういうところでこれまで研究していたのか、今後どのような生活をしていくのかということまでは意識しないことがほとんどです。しかし、今回のプログラムで日中双方の研究者の方とお話したことにより、非常に限られた例ではありますが、研究者の方が国をまたいで研究にいそしみ、慣れ

ない環境の中でも自身の業績を積み上げたり、研究費を獲得しようと努力されたりしている様子を知ることができました。学術情報基盤を整え、提供する役目を持つ図書館職員として、留学生や海外からの研究者へのサービスを再考し、積極的に行うべきだとますます考えるようになりました。

最後に、今回の中日若手科学技術担当者交流計画を企画された中国科学技術部の皆様、1週間もの間78名の集団をまとめ、引率し、様々な手配をしてくださったJSTと訪問先各機関の担当者の方々、特に通訳の任にあたってくくださった方に心から感謝の意を表します。

注

- 1) この交流計画は、「中国政府による日本行政官・大学関係者招へいプログラム」「中日科技人員交流計画」等多くの別称がありましたが、本稿では「中日若手科学技術担当者交流計画」を用いました。
- 2) 科学技術振興機構. “さくらサイエンスプラン事業概要”. <https://ssp.jst.go.jp/outline/index.html>, (参照2016-12-07)
- 3) 島根大学法文学部・人文社会科学研究科. “釜山大学校考古学科（韓国）の教員・学生が島根大学を訪問しました（さくらサイエンスプラン）” <http://www.hobun.shimane-u.ac.jp/docs/2016090500014/>, (参照2016-12-07)
- 4) 科学技術振興機構. “さくらサイエンスプラン活動報告（公募計画コース）第120号「中国・寧夏医科大学の大学生が島根大学医学部を訪問」” https://ssp.jst.go.jp/report/k_vol120.html, (2016-12-7参照)
- 5) さくらサイエンスプランFacebookの記事. 2016年10月8日. <https://www.facebook.com/sspjapan/posts/679155048911628>, (2016-12-7参照)
- 6) OSCEとは客観的臨床能力試験のこと。模擬患者への面接や、各種シミュレーター等により、実習に入る前の医学部等の学生が、臨床現場で適切に対応できる態度や技能を備えているかどうかを判定する。



自著紹介

『出雲国誕生』

(吉川弘文館、2016年11月)

大橋 泰夫

(島根大学法文学部社会文化学科教授)

本書は、古代出雲国がどのように形成されていったかについて、考古学と文献史学、歴史地理学との学際的研究の成果を中心に一般向けにまとめたものです。

島根大学は出雲の地にあります。奈良時代の西暦733年に、土地の様子や特産物、地名の由来などを記した地誌『出雲国風土記』が完成し、政府に提出されました。風土記は全国で編纂されましたが、とくに『出雲国風土記』はほぼ完全に残っており貴重で、本書でも扱っています。

奈良時代の島根大学一帯は、『出雲国風土記』によれば島根郡山口郷に所在していました。大学構内の発掘調査によって、当時の人々が使っていた土器が出土し、島根大学ミュージアムに展示されています。東方にみえる嵩山の頂上には、緊急時に火をもやし煙をあげて都に急を知らせた烽^{とぶひ}が置かれ、その脇を隠岐

国に渡るための隠岐道という道路が延びていたことも記されています。

奈良時代の出雲国は国・郡・里の三段階に編成され、国に国府、郡に郡家という役所が置かれていました。それまでの古墳時代に地域を治めていた出雲国造などの地方豪族は郡の役人に任じられ、都から派遣された国の役人（国司）の下位に位置づけられることになります。

島根大学考古学研究室では、出雲国の形成過程を考えるために松江市朝酌町廻原1号墳の発掘調査を行いました。調査によって、この古墳は出雲で最後に造られた古墳の一つであることが分かり、国郡制に基づいて地方支配が強化されていく中で、豪族層は古墳築造を終えていくことが明らかになりました。こうした学生とともに実施した調査結果も本書には盛り込んでいます。

古代の出雲は、7世紀後半から8

世紀初めの奈良時代に入る頃、大きな変革を迎えました。本書では、この点を詳しく紹介しています。『出雲国風土記』に記された出雲国府、郡家（郡役所）や道路の発掘調査成果などからみて、出雲国では7世紀末頃から8世紀にかけて、役所や都から延びる古代山陰道の整備が進んだことがわかります。こうしたあり方は出雲国だけではなく、全国的に広くみられるものであり、国府の設置を契機として諸国で国の骨格は形成されていきました。

出雲国の中心にあったのは国府であり、今の松江市大草町を中心にした意宇平野に位置し、六所神社の境内地と重なって中心施設の国庁がみつかり、周辺の施設とともに史跡公園となっています。付近には『出雲国風土記』に記された、山代郷正倉

（郡役所の倉）や寺院（四王寺跡、来美廃寺）も整備されています。八雲立つ風土記の丘展示学習館にある出雲国府の模型には、大陸風の丹塗り瓦葺き建物が立ち並ぶ様子が復元されています。

『出雲国風土記』は、わが国の古代史研究に大きな影響を与えてきました。本書では古代出雲の姿を紹介し、地域社会の実像に迫ることを心がけました。少々専門的なところもありますが、出雲の地で暮らし学ぶ島根大学生のみなさんにはぜひ一読をおすすめします。その上で、『出雲国風土記』に記された、出雲国府をはじめとする現地に立って古代出雲の世界を知ってほしいと思います。





自著紹介

『日本における メディア・オリンピックの誕生： ロサンゼルス・ベルリン・東京』

(ミネルヴァ書房、2016年2月)

浜田 幸 絵

(島根大学法文学部言語文化学科准教授)

人や情報の地球規模での移動が活発となっている現在では、オリンピックを特別なイベントであると考える人は少なくなっている。しかし数十年前まで、オリンピックは人々が外の世界に触れる極めて貴重な機会であった。1964年東京オリンピックでは、日本にかつてないほど多くの外国人がやってきて、その国際的な雰囲気には酔いしれた。また、4年に1度開催されるオリンピックは、自国で開催されなくてもメディアで大きく報道される。オリンピックの報道は、大勢の人々に、自分では行ったことのない国々とそこに生きる人々についてのイメージを提供してきた。

本書は、メディアとオリンピックとが結びつく歴史的過程に着目し、特に1930年代の日本において、メディアによって伝えられたオリンピックがいかなる社会的・文化的意

味をもち、国民意識の形成とどのように関わっていたのか、を明らかにしたものである。オリンピックは、メディアが報じることによってはじめて人々に認識されていく。メディアがなければ人々は、自分が今いる地点から遠く離れた場所で開催されているオリンピックのことなど、知ることはできない。オリンピックはメディアの技術革新の機会にもなってきた。このように考えると、メディアとオリンピックとの関係は様々な観点から検討していくことができるが、本書で焦点を当てているのは、日本においてマス・メディアのイベントとしてのオリンピックが成立していく時期、具体的には1932年ロサンゼルス・オリンピック、1936年ベルリン・オリンピック、1940年東京オリンピック（1938年7月に返上）である。

本書は、2部構成になっている。

第1部では、メディア（新聞社や放送局）を中心としながらも国家や企業も含めた諸組織が、オリンピックにどのように関与していたのか、1940年東京オリンピックの計画がどのように展開していたのかについて、明らかにしている。初期のオリンピック報道は現在の感覚からすると、非常に少なく、内容も競技結果を淡々と伝えるだけでドラマチックな要素は欠けていた。写真も少なく、ラジオ放送もまだない。オリンピックがメディアの大規模報道の対象となり、広範に国民を巻き込むようになるのは、1930年代のことである。

第2部では、1930年代のオリンピック報道の内容（メディアがオリンピックをどのように描き出したのか）を分析している。1932年のロサンゼルス大会の報道では、日本人と外国人を対立的に捉える図式がみられ、戦争のメタファーが用いられるなどした。単純化していうと、この時期にナショナリズムを高揚させるような表現が目立つようになったということになるが、本書では、日本人の特徴（優位性）を際立たせるために「外国人」が用いられている点を指摘するなど、ナショナリズムの表現のあり方を詳細に分析している。東京の新聞、地方の新聞、大衆雑誌、女性雑誌、総合雑誌など、複

数のメディアを横断的に取り上げ、オリンピック報道のなかでの地元への帰属意識と国家への帰属意識との関係、女性や家族の描かれ方、知識人による批判的意見の表明、広告の果たした役割などについても論じている。

「戦前日本のオリンピック」ときくと、国威発揚に利用された暗いオリンピックを思い浮かべる方もいるかもしれないが、本書で明らかにしているように、1930年代のオリンピックは、ナショナリズムと強く結びつくとともに、人々に国際社会を体験する機会を提供し、消費社会のなかの娯楽としても受容された。この頃、世界の異なる場所が、一つのイベントによって互いに連結しはじめていたのであり、それは、多くの人々が心を躍らせるようなものであったといってよい。ここに、現代のオリンピックの原型があったといえる。

筆者が学生時代を過ごした2000年代は、ごく普通の人々が関わっているポピュラー文化を対象とした研究が盛んとなった時期であった。スポーツやオリンピック、メディアの文化は、世俗的なもので、ありふれているため、それを真面目に研究したところで何がわかるのかと思われるがちである。ただ、例えばメディア

のイベントとしてのオリンピックをみると、そこには、様々な権力関係のせめぎあいがあり、それを通して私たちの見ている世界（「現実」）がどのように構成されているのかを批判的に問い直すことが可能となる。本書は博士論文を改稿した学術書で

あるため一般的な書籍としては読みにくいと思うが、少しでも多くの方に、オリンピック、大きくいうと現代のメディアや文化を読み解くことの面白さを感じていただけると嬉しい。





自著紹介

『研修医のための臨床心エコー： 診断へ導く撮り方・読み方』

(文光堂、2016年2月)

田 邊 一 明

(島根大学医学部医学科内科学講座内科学第四教授)

本書は初期研修医や新専門医制度での内科専攻医、循環器の勉強を始めた方を対象とした心エコーの入門書です。携帯できて、ベッドサイドや救急外来で心エコーを記録するときに、あるいは検査レポートを解説する時に“指導医”となってくれるような本を目指しました。

前立腺がんを早期発見するためのスクリーニング検査としてPSA (prostatic specific antigen) があります。PSAは早期がんの発見のためのスクリーニング検査として行われるほか、進行がんの診断や治療経過をみるうえでもとても重要なマーカーとなっています。心エコー検査の役割は、もちろん心血管疾患の診断であり、他の検査や適切な治療を行うためのきっかけになります。しかし、心エコー検査の役割がPSAなどの血液マーカーと決定的に違うのは、所見が検者に依存するというこ

とです。PSAは血液採取すれば検査値が出てきて、基準値内かどうかという判断が即座にできます。

循環器診療においては、

- 1) 問診や身体診察（特に聴診は重要）で疾患をピックアップ
- 2) 胸部X線写真、心電図で診断を深める
- 3) 心エコーやCT、心臓カテーテル検査、血管造影と進み、最終的な診断を確立する

というのが正しい流れと言えます。心エコーはPSAのような単独の指標で異常と正常を区別することのできるものではありません。異常と診断するためには基本的な計測に加えて心機能や心血管疾患の知識が要求されます。所見のある心エコー画像を観察し、これは“おかしい”と思えるかどうかにかかっているのです。そのためには、疾患に特徴的な画像を覚えることが重要です。基本

断面の描出をマスターし、正常の心エコー画像とはどういうものか、また計測項目の正常値・基準値を把握しておくことが必要となります。症例や経験を重ねると、各心血管疾患における特徴的な心エコー画像のパターンを覚えてくるものです。同時に、なぜそのような特徴的なパターンが出現するのかについての病態を理解できるようになります。病態がわかると、この症例はきっとこのようなパターンが認められるはずだと想定しながら検査に向かうことができ、おのずと効率よく目的とする画像描出に到達することができるようになるはずです。

心エコーに課せられた役割は年々多くなり、装置の進歩、新しい機能や指標が登場し、勉強することが増えていきます。最初から学ぶ量は膨大です。私のMayo Clinic留学時代の師であるJames B. Seward先生から「心エコーの進歩についていける

ようにすべて勉強しなさい」と激励していただきました。みなさんにもSeward先生の言葉をそのまま贈りたいと思います。

心エコー上達のためにはベッドサイドや検査室で経験を積んでいくしかありません。正しい断面を覚え、記録しながら考えるという作業を繰り返すことが必要です。やがては自分の心エコー診断がその後の治療や経過にどう影響したかという経験も診断能を上げるためには必要です。本書には筆者自身が経験してきたこと、日々の診療で実際にやっていること、研修医の先生方や循環器の勉強を始めた先生方に指導していることを詰め込みました。本書は心エコーの「導入」に重点を置いたものであり、網羅できていないことはたくさんあります。まずは心エコーの窓から覗く心臓、大血管、心機能や血行動態に興味を持っていただける機会になることを願っています。



原稿募集

—『淞雲』原稿執筆の手引き—

1 編集方針

本誌は、島根大学附属図書館が編集・発行する雑誌です。本誌は、島根大学附属図書館の利用者である学生及び教職員を主な対象読者として、大学図書館及び図書館資料についての調査・研究成果や附属図書館の活動報告、資料紹介等を掲載します。学生や教職員の皆様からの投稿も広く受け付けます。

2 投稿規定

(1) 原稿の種類

島根大学附属図書館及び大学図書館、公共図書館など図書館に関する内容の調査・研究成果や活動報告、資料紹介等で、次の種類に該当するものとします。

論文	図書館及び図書館資料に関連するオリジナルの研究論文
報告	図書館業務・サービスに関連する報告、図書館資料に関連する報告（資料紹介など）
短報	本学教員自著紹介、書評、図書館に関連するショートエッセイ
その他	館長が必要と認めるもの

(2) 原稿の提出・問い合わせ先

電子メール本文に以下の必要事項を明記のうえ、次の提出先に提出してください。

・必要事項

- ①投稿希望（論文・報告・短報・その他 のいずれかを選択してください）
- ②投稿者所属および氏名
- ③論題（縦書き・横書き のいずれかを選択してください）

・提出先

島根大学附属図書館広報チーム（『淞雲』編集委員会）

e-mail : library@lib.shimane-u.ac.jp

TEL : 0852-32-6088 (内線) 2780

(3) 原稿の査読

本誌に掲載する記事は、内容に応じて編集委員会または、編集委員会が依頼する査読者による査読を行い、査読結果に応じて、著者に対して、原稿の修正、改善をお願いすることがあります。

(4) 著作権

本誌に掲載された記事の著作権は、著者に帰属します。ただし、本誌は冊子で発行するとともに電子版を公開するため、事前に電子化に伴う複製及び送信可能可並びに公衆送信を許諾していただきます。

(5) 校正

初校のみ著者校正をお願いします。

(6) 学術情報リポジトリSWANへの掲載

掲載された記事は、島根大学学術情報リポジトリSWANへ掲載し、インターネット上に公開します。

(7) 掲載原稿の取扱い

提出された原稿は、原則として返却しません。

(8) 謝礼

執筆者1名につき、掲載号1部とご希望により別刷り20部まで贈呈します。

(9) 原稿執筆要領については、下記のアドレスをご参照ください。

<http://www.lib.shimane-u.ac.jp/menu.asp?mode=l&id=1692>

2016.11.16改訂

た結果であり、本来的には文化財的資料を残し続けるという営みは常に困難を伴うことなのである。このような偶然性を重く受け止め、この偶然がさらに続くことを願うばかりである。

なお、本稿は「河本家稽古有文館シンポジウム―古典籍発見の軌跡とその展望―」〔於琴浦町生涯学習センター「まなびタウンとうはく」二〇一六年一〇月三〇日〕における基調講演を基にしている。

注

1 原豊二「稽古有文館蔵『礼儀類典』図絵」『米子工業高等専門学校研究報告』三十六号（二〇〇〇）。後に『源氏物語と王朝文化誌史』（勉誠出版、二〇〇六）所収。

2 原豊二・山藤良治「稽古有文館（河本家）蔵古典籍目録」『米子工業高等専門学校研究報告』三十七号（二〇〇一）。

3 原豊二「稽古有文館（河本家）蔵古典籍解題」『米子工業高等専門学校研究報告』三十九号（二〇〇三）。

4 藤本文庫ならびに米子市立図書館の設置については『新修米子市史 第三巻 通史編 近代』（米子市、二〇〇七）に述べられている。

5 原豊二「稽古有文館蔵『百番歌合』翻刻と解題」『専修総合科学研究』一〇号（二〇〇二）があるが、翻字ミスが

多い。デジタル画像にて確認の上、参照していただきたい。

付記・河本家の蔵書のうちデジタル化されたものについては、以下のTRC-ADEAC株式会社のデジタルアーカイブシステムから閲覧が可能である。

<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJ1502U/3290515100>

六 デジタル・アーカイブ化の効果と展望

現在、河本家蔵書は着々とデジタル保存ならびに公開が進められている。そのことがどのような効果を発揮するのかについて考えてみたい。

まず、技術的・環境的な問題で言えば、これは私が河本家の蔵書調査を始めた頃に比べて雲泥の差というほかはない。インターネットさえあれば、その本の詳細を見ることが可能であり、肉眼よりよく見えることすらある。一方、広がりという点から言えば、世界中の人々が見ることができるようになっているわけで、特に海外の研究者にとっては有益であろう。

調査研究活動のみならず、社会的な意味での効果も考えられる。例えば、教育活動であるが、大学・高校・中学校・小学校ないしは社会人向け講座等の教材としての利用に適している。実際に勤務先の大学での講義や、一般向けの公開講座で本システムを用いたが、有効性を実感できる。さらに、地域社会という枠組みで見れば、このことが特に琴浦町を中心にして文化的な刺激を与え続ける可能性が見て取れよう。例えば「和本のまち こと

うら」などというような地域性を示すこともできるに違いない。

一方、現実的な問題としてこれらの蔵書に用いられている変体仮名やくずし字は誰もがすらすと読めるわけではない。専門的な教育と本人の努力がどうしても必要になる。各書籍の解題はもとより、翻字や現代語訳の掲載へむけての取組みも求められる場合があろう。ただ、こうした作業を全ての資料について行うのは現状では困難であり、既に紙ベースで公開した翻字等の再活用を進める方が現実的なようである。

七 まとめにかえて

やや雑駁ではあったが、河本家の蔵書についての考察をまとめてみた。やはり、蔵書全体を見渡すということは一個人の力量を超えるものだと、改めて認識することになった。そうであればこそ、むしろ広く公開していくことが求められるのであろう。

デジタル化の一方で、実物の保存・保管についてもより意識的でありたいと思う。河本家の蔵書は幸運にも今私たちの現前にある。ただし、それは様々な偶然の重なっ

た判詞であると言えよう。なお、『類題鯁玉集』も河本家に所蔵されている。

九十一番 左 同（駒か）

いざけふはのりてをゆかん雲井にもとふべくなかぬ
鶴ぶちの駒 通緒

右

君がよの千よのすがたになびくらし牧のあら駒鶴ぶ
ちに 好繁

左 三・四・五句 飯田秀雄ぬしの歌に似寄てよろ
しからず。

右 よく聞こえたり。論なく勝。

九十一番であるが、左の歌が飯田秀雄（一七九一～一八五九）に似ていてよくないのだと指摘する。飯田秀雄は江戸時代後期の神職で、歌人。飯田俊子・年平の父にあたる人物でもある。先の衣川長秋に師事した後、和歌山で本居大平、加納諸平に学んでいる。この判詞の解釈であるが、判者による飯田秀雄の詠歌自体に対する評価がそもそも低いのか、あるいはその詠歌に似ているこ

とに対する単純な指摘なのか、やや判断に迷うところである。ただ、飯田秀雄という具体的な人物名がここに記されることの意味はあるのではないかと思う。

河本家の面々は、幕末期の因伯歌壇の動きに関係があったと言えよう。そして、その立ち位置は加納諸平を中心とした柿園派の末流ということになる。ここに示した通緒の和歌は歌人の和歌というよりも、それを学ぼうとする者の和歌である。この「学び」の姿勢こそが、彼らの詠歌の拙劣さを超えて、当時の地域文化の実際のあり様を示すものとして興味深いわけである。地方歌壇のあり様は全国的な状況と地域的な状況の二面を持つと考えられる。普遍的な意味での近世後期の全国的な文芸層の広がり、と、柿園派の隆盛が特に顕著だが、因伯地域における独自性の双方を理解しておく必要がある。

河本家の蔵書群はこうした問題についても大きな示唆を与える。それは、『百首歌合』から読み取れる問題と同時に、現在の河本家蔵書の語るものことでもある。和歌関連の資料がある一定のまとまりで所蔵されている点と、河本家自体の文芸的活動とは深いつながりがあったのだと指摘しておきたい。

「あらしは」とすべし。語勢つよくして『新古今』の風致あり。論なく勝。

少し飛ぶが四十九番で、歌題は「雪」である。右の歌は詠者が「遊子」であるが、どういう人物かは不明である。この右の歌について、判詞を基に作り直すと「鐘の音も間遠に暮れて高砂の松の嵐は雪とこそなれ」となり、傍線部が元の歌から変わったところである。これは添削と言うよりも、読み直しのような観さえある。さらに、この歌は『新古今集』の「風致」があつて「勝」だということ。ここまで大きく改変したにもかかわらず、この歌が勝つてしまうのもよくわからないが、どうやら判者は『新古今集』を高く評価しているようなのである。鳥取藩では衣川長秋が『新古今集』の口語訳を執筆したことなどもあり、その関係で因伯歌壇においては『新古今和歌集』の評価が相対的に高かったであろう。このことは地域の事情や学統にあると言つてよい。

七十二番 左 冬恋

待ちわびてまたかきちらすうづみ火もなみだにきゆ

る夜半も有りけり 遊子

右

冬がれの言の葉草はくちぬとも思ふかぎりはしひて頼まん

左 二ノ句「かきのみおこす」とありて、四・五「なみだの露にきゆる夜は哉」とすべし。

右 上ノ句 聞こえがたし。『鰻玉集』に「忘れ草枯れ行く冬に也にけりつれなき人もしひてたのまん」といふ歌あり。かくよめばよくとのへり。左勝。

この七十二番も大幅な改変を求めている。先程と同様に左の歌を判者の意向に沿つて改変すると、「待ちわびてかきのみおこす埋み火も涙の露に消ゆる夜半かな」とこのようにだいぶ異なつてしまう。この歌が勝つてしまふのも、前の例とよく似ている。興味深いのは、右の歌で、ここでは加納諸平編『類題鰻玉集』の歌が引かれている。『類題鰻玉集』は第七編まであり、幕末期の歌集として特に重要なものと言える。主に柿園派と呼ばれる歌人たちの歌が収められているが、因伯歌壇はその柿園派が大変強い地域でもあった。そういうことが反映され

うように「どふぞ聞こえぬやうに」という意味になり、通緯の意識とは異なってしまう。無理に文法的に処理すれば、「ざりなん」（打消しの助動詞「ず」の連用形に、強意の助動詞「ぬ」の未然形、推量の助動詞「む（ん）」ということにもなるだろうが、判者は「ざらまし」を提案している。「まし」は反実仮想の意味であり、歌ことばとしても、実際には聞こえているという状況説明の点においても適当である。この判詞は著しく教育的であり、そこに載せる『詞八衢』は本居春庭著の文法書である。なお、『詞八衢』は河本家の蔵書中にもあり、関連性を考えるべきである。さて、左の歌、文法的には間違っているのだが、ここではどういうわけか「勝」ということになっている。

二十六番 左 山家鹿

世をいとふ片山蔭に住むとてもつまこふ鹿の声は淋しき

右

霜ふけてあらしさえ行松の戸にうき世かはしき鹿の
声かな 通緯

左 「妻こふ鹿」といふも『八衢』にかなはず。「つまとふ鹿」とすべし。「恋ふ」といふ時は「こふる」となくては語格たがへり。

右 四ノ句「うき世をきそふ」とすべし。左右とも上上の句、猶おだやかならず。此番持。

続く二十六番でも文法的な判詞が目立つ。左の歌の「妻恋ふ鹿」は間違いで、上一段活用の「恋ふ」の連体形は「恋ふる」でなくてはならない。ただ、ここでも別に「妻問ふ鹿」を提案している。歌語であるから、文法的に整合性があればよいというわけではないらしい。最後にある「持」とは引き分けのことである。

四十九番 左 雪

都にも冬きにけらし打わたす柳桜にふれる白雪

右

しづかなるすがたも見えで高砂の松の嵐も雪とこそなれ 遊子

左 （二字不明「拙」か）雑にしてとのひがたし。
右 初・二「鐘の音も間どほにくれて」とありて

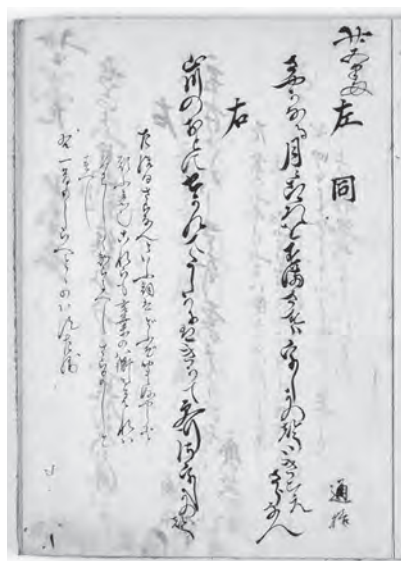


写真4 百番歌合 二十五番



写真3 百番歌合 表紙

二十五番 左 同(鹿)

さやかなる月にこころをすまさずはをしかの声はき

こえざらん 通緒

右

山川のおとにせかれてたしかにはきかで更行くさを
しかの声

左 結句「ざらん」といふ詞は「どぶぞ聞こえ
ぬやうに」と願ふ意也。これらも『言葉の八衢』を
見ればくわしく知るべし。「ざらまし」とすべし。

右 一首のしらべとのはず。左勝。

この二十五番では「鹿」を詠んでいる。左は十二代の
通緒で、右の詠者は不明である。歌の後が判詞であり、
まず判者は左の歌の文法的な誤りについて指摘してい
る。左の歌で通緒は「牡鹿の声は聞こえないだろう」と
いう意味で詠みたかったようなのである。しかし、「ざ
らん」では、「ざら」が打消しの助動詞「ず」の未然
形であり、そうなると接続の関係上、次の「なん」が詠
え(願望)の終助詞になってしまう。つまり、判者の言

公共的な蔵書群へと成長したことを物語っているとも言える。

その一方で、稀少な書物の所蔵のあることも押さえておきたい。ここで、具体的な書名を挙げることはできないが、伝来自体が極めて稀なもの、また孤本（河本家による制作）の存在は学術的な意味において大変貴重である。

さらに言えば、蔵書自体のあり方として、その集積・成長はあるにしても、散佚の形跡がほぼ見当たらないことも興味深い。例えば、河本家に関わる蔵書印を持つ古典籍は、河本家以外のところでは一切確認できていない。散佚の形跡が見当たらないのである。このことは、住居となった建築物の維持や、地域の共同体の安定した継承などによるところも大きいであろう。また、蔵書とともにこれも膨大に残された古文書からは、逆に蔵書に関わる記載もあり得るわけで、こうした古文書の残存も幸運と言わねばなるまい。

河本家蔵書自体に戻って言えば、その所蔵の多くの部分は近世期の版本であり、書誌学的に見て、際だって古いとか、すべての蔵書が絶対的に稀少である、と言うべ

きものではないだろう。けれども、これらの蔵書を群として見た時、また地域史や地域文化との関連で見た時、ここに含まれる情報はある一定の学術的な刺激を与え続けるものに他ならない。この蔵書群は、歴史的・文化的総体という広い概念から捉えるべき資料であり、文学研究ないしは歴史研究といった限られた学問領域のみからの判断を嫌う傾向にあるものと言える。もっとも、資料自体はもとより何らかの学術研究のために存したわけではないのであるから、近年のデジタル化によって逆はその意義について問い返されるべきは、むしろ現在の私たちの資料への向き合い方にあるのだろう。

五 『百首歌合』を読む

河本家の蔵書に『百首歌合』というのがある⁵⁾（写真3・4）。これは蔵書家でもあった十二代河本通緒の主催・編集と思われる歌合である。判者は、歌人の小谷古蔭が想定されるが、明確ではない。歌合であるから、左右に分かれて歌を詠み合い、その上で判者が判詞を述べ、勝敗を定める。ここでは、そのうち数番を取り上げ、その内容について考察してみたい。

館する。⁴

ところが、現在の米子市立図書館に藤本文庫旧蔵本と確認できるものは少ない。戦中・戦後の混乱期を経て、その動きは複雑であつたようだ。これもまた蔵書印で考えてみたい。現在も米子市立図書館に所蔵されている蔵書には「藤本文庫」の印とともに「米子市立図書館」の印が捺されている。この両方の印のあるもので館外に流出してしまったものは頗る多い。次に米子市立山陰歴史館に「藤本文庫」印のあるものがある。これは一定のまとまりのある分量である。さらに鳥取大学医学図書館にも「藤本文庫」印のものがあり、その多くは医書である。現在、河本家に所蔵されているグループBの蔵書には「藤本文庫」以降の蔵書印は認められないので、どうやらこれは西伯郡教育会に移される前に河本家に収蔵されたと考えられる。藤本文庫の閉鎖が昭和四年であるから、この時期からあまり時間をかけずに河本家に移されたのではないか。もちろん藤本氏個人の蔵書もあつたわけで、グループBの蔵書印の中にはそれを思わせるものも認められるので、やや足下がおぼつかないのであるが、大きく言えば、藤本重郎氏に関わる蔵書群がBであり、それ

らは現在の河本家蔵書の中で言えば、最も新しい時期の収蔵として考えられるというわけである。

こうしてみると、河本家の現在の蔵書は、近世中期頃から近代に至るまでの長期間に渡って形成されたものであるということが言えそうである。むしろ、こうした流動的な蔵書のあり方にこそ注目していきたいものである。

四 蔵書の特徴

河本家蔵書の特徴を簡単に述べようと思う。言うまでもなく現在のという意味においてであるが、まずはその膨大な量である。約八百五十種、五千冊弱という分量は、地方の一民間の家の古典籍の蔵書数としてはあまりに多過ぎる。鳥取県内はもちろんのこと、全国的に見ても珍しいのではないか。

膨大な量は自ずと多種多様な書籍があるということにも繋がる。文学・歴史・仏教・神道・産業・目録・書道・往来物・漢籍・日本漢文などなど、その分野とジャンルの広がりはやはり圧倒的であろう。これは、結果的にという面もあるが、一個人の蔵書群からより社会的・

箱（その多くは現存している）ごとの分類であり、その箱番は「第壹号」から「第三十八号」までである。一方、目録②は分野別ないしは整理順の目録のようにも見えるところもあるが、よくわからない。

ところが、現在、河本家に所蔵されている蔵書は目録①②に記載されてあるものよりも相当に多いのである。ということであれば、目録①②に記載されていない書物は、明治時代後期以降に河本家に収まったということの意味するはずである。

このことを考えるために、ここで河本家の蔵書に捺された蔵書印について見てみる。もっとも、ここではすべての蔵書印を確認したわけではなく、蔵書印それ自体も多くあり、その選別も単純ではない。中には旧蔵者のものと考えられる蔵書印も見受けられる。やや曖昧なところも残しつつ、確認し得るところで言えば、次のグループA・Bの両群を知ることができようか。

河本家蔵書に見られる主だった蔵書印

A 「伯州寛津河本氏」「稽古有文館」「河本氏」「河本

B 「藤本文庫」「藤本重郎蔵書之印」「藤本氏図書印」

「藤本氏蔵書印」

このうち、グループAは河本家において伝来した蔵書に捺された印である。これらの蔵書印は主に十二代の通繕（明治十六（一八八三）年没）によるものと考えてよいだろう。なお、通繕はよく書籍を購入したようで、この時期は、通繕以前に既に所蔵されていた一部の書籍と通繕自身が購入した書籍がともに存したような観がある。つまり、グループAは河本家の当主の趣向が大いに反映された書籍であり、同様な営為は次の十三代芳蔵の時代にも継承され、先ほどの目録①②が作成されたのであろう。次のグループBであるが、これは藤本文庫ないしは藤本重郎（一八四九～一九三四）個人の所蔵本であり、グループAとは特に分けて扱うべきものである。

大正二（一九一三）年、東伯郡八橋町に私立藤本文庫が開設される。蔵書数は五万冊を誇ったが、昭和四（一九二九）年に閉鎖されてしまう。蔵書のうち三万余冊が、後に西伯郡教育会に入る。さらに米子市役所、明道小学校等に分散保管された後、昭和十七（一九四二）年、藤本文庫数千冊を整理して、当時の米子市立図書館が開

必ずしも明確な結論に至らないこの問いに対して、およそのスケッチをここで提示したいと思う。

そもそも、河本家蔵書のうち江戸時代より前、中世期までに作られた書物は存在していない。よって、蔵書形成においても、当然近世以降のことと認められる。蔵書の書き入れ等から、既に江戸時代中後期において河本家の所蔵であつたと考えられるものは、それなりにはある。けれども、蔵書全体という枠組みにおいて考える場合、その形成は特に幕末から近代を意識する必要があることを言いたい。

河本家には二点の蔵書目録が残されている。一点は外題に「稽古有文館書目録」とある写本【写真1】で、明治期のものと思われる。これを目録①とする。二点目は同じく外題に「書目録」とある写本【写真2】で、表紙に「明治十八年九月拾日」「河本燕處」とある。河本燕處は、河本家十三代の芳蔵のことである。これを目録②とする。両目録ともにデジタル公開がされているので御覧いただきたい。目録①の作成年代は正確には不明であるが、目録②の成立時期とさほど離れていないものと思われる。なお、目録①は当時河本家にあつたであろう書

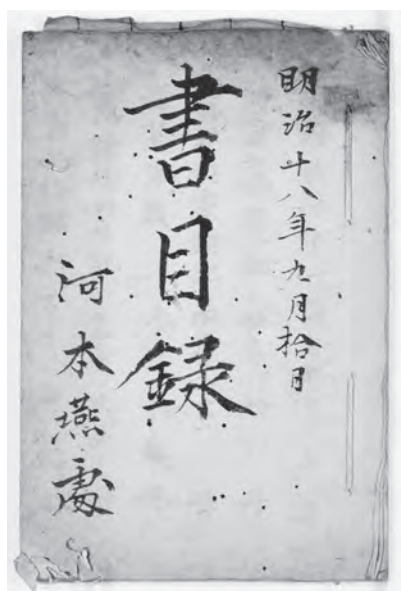


写真2 書目録



写真1 稽古有文館書目録

この時期を前後して、別に調査を進め、米子高専に保管されていた蔵書に、河本家にまだ残されていた蔵書分を加えて、簡単な所蔵目録を作成した²⁾。この目録は、書名と冊数、版本か写本かの区別しかしていないので、全く学術的な調査に値するものではないのだが、それでもその後の調査の見通しを、最低限示すことに結果としてなったと思う。その後、主だった古典籍の紹介のための、これも簡易な解題を作成した³⁾。

この時期、科学研究費補助金として「稽古有文館蔵古典籍の研究」が採択されていたので、古典籍のデジタル画像化を試みることにした。これは、CD-ROMを記録媒体としてその画像をPDF化したもので、寛文十年刊『義経記』と慶安元年刊『鉄槌（徒然草の注釈書）』の二点の書面の画像すべてを収録したものである。これらは二〇〇一年度から二〇〇二年度の仕事である。現在の技術からすれば、なお中途半端なものであったが、古典籍のデジタル化という点において、それなりの意味はあったかに思っている。

二〇〇四年度からは、河本家の蔵書を国文学研究資料館の調査収集事業の対象としていただくことになった。

これは同館の江戸英雄氏のご尽力によるものである。このことにより、全国基準の調査方法による調査が始まり、改めて河本家蔵書のすべてに目を通すという作業を行うことになった。国文学研究資料館の調査カードは大変精密なものであり、これらの調査によって、詳細な書誌を知ることができた。なお、翌二〇〇五年度からは、当時松江工業高等専門学校にいらっしゃった山崎真克氏にも調査員としてお手伝いいただくことになった。

さて、十年に及んだ国文学研究資料館による調査は、二〇一四年度をもって終了した。蔵書中全体の七割程度の調査がなされ、そのうち文学関連のものはおおよそ完了した。この間、記録された調査カードは蔵書に関わる基礎資料として大変有益である。この調査事業を引き継ぐ形で、島根大学を中心にした現在の調査段階へと進むことになった。現在の調査は、蔵書のデジタル保存と公開が主な目的であり、今後はデジタル化した画像によって、より深い考察が行われることになる。

三 蔵書の形成とその集積

河本家の蔵書はどのように形成されたのか。現状では

河本家の古典籍の全体像と特色

—調査開始以来の歩み、

あるいは『百首歌合』のこと—

ノートルダム清心女子大学文学部准教授 原 豊 二

一 河本家の古典籍の発見

著者が鳥取県にある米子工業高等専門学校に赴任したのは、一九九八年四月のことである。当時、河本家の古典籍の多くは同校の図書館の一室に、古文書とともに保管されていた。側聞するところ、民俗学調査の一環としてこれらの資料が同校に寄託されたということであった。全くの新品の資料であることにも興味を抱いたが、当時はまだ目録などもなく、手当たり次第にこれらを見てゆくよりほかなかった。当初の感触としては、版本の多いこと、また江戸時代のもものが多く、時に明治期のものを見出すことがあった、というくらいであった。

二 河本家の古典籍の整理と紹介

発見当初、気にかかったのは『礼儀類典』という書物である。これは有職故実に関する部類書で、大変大部なものでもある。この『礼儀類典』の調査にまず着手した理由であるが、宮中儀礼を調べるために編纂されたこの本が、地方の一民間家庭から見つかったその理由があまりに不可解であったのと、著者自身が平安文学を少しかじっていて、その点からも興味を抱いたからである。特に図絵三冊の出来はよく、視覚にも十分訴えるものがあつた。

この水戸光圀編『礼儀類典』については、宮内庁書陵部をはじめ各地に同書の閲覧に向き、また先行研究を参考にして勤務校の紀要に紹介した¹。同書の発見は、二〇〇二年十一月の河本家住宅の公開に合わせて一般に展示され、地元のメディアでも取り上げられることになった。当時のスクラップ記事を見ると、どの紙面の見出しも「黄門さまの」となっていることから、報道については水戸光圀の名によるところが大きかったのではないかと思う。

淞 雲

島根大学附属図書館報 第19号

2017 (平成29) 年 3 月 3 日 発行

編集・発行 **島根大学附属図書館**

本 館 〒690-8504 松江市西川津町1060
TEL (0852) 32-6083 FAX 32-6089

医学図書館 〒693-8501 出雲市塩冶町89-1
TEL (0853) 20-2092 FAX 20-2095

印 刷 今井印刷株式会社



島根大学附属図書館